
アンノウン・エンジェルズ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・エンジェルズ

【Nコード】

N8547A

【作者名】

雨月

【あらすじ】

アンノウン・エンジェル

罪人天使の時雨は神様の野望を阻止して人間界に帰って来た。しかし、彼が休めるところはあまりないのである！今回で多分最後となる時雨の生活にご注目！

そのいち！！ ツンツン魔女が猫を被ると剣治はながされる？

魔界から帰って来て数週間が過ぎた。学校に行ってみると別段欠席扱いにもされていなかった。（千夏姉さんが頑張ってくれたらしい。）今日はいたって平凡な一日のはずが凄い事が起きた一日だった。まず、朝。いたって普段とかわらない。

「時雨殿、朝だぞ！」

最近よくシャドさんに起こされる。

「あ、うんおはようシャドさん。」

そして隣には蕾が寝ている。（夜はいないが朝になると必ずいるのだ。）僕は蕾を起こす。

「ほら、蕾朝だよ。」

「そうだ、蕾殿朝だ！」

「うーん、わかったよ。おはよう兄様、シャドさん。」

シャドさんの事は美奈さんにも話してある。
部屋の扉が開き、美奈さんが入ってくる。

「みんな起きました？今日は林檎が並んでます！」

林檎と聞いてシャドさんは消え、蕾も走って行った。そして美奈

さんも部屋をでていった。

「……千夏姉さん、でてきて大丈夫だよ。」

壁が剥がれて千夏姉さんが登場。（この前忍者のテレビを見たらしい。）

「時雨おはよう。やっぱり壁に寝るのははつきりいつてしんどい。」

僕が戻ってきてから千夏姉さんはみんなにばれないようにしてきたがそろそろ限界みたいだ。

ある日は天井から飛び降りてきたり、床からでてきたりしていた。（その他にも机の引き出しからでてきたりしていた。）

「……時雨、正直ネタが尽きた。そろそろお前の身体に戻る。」

あっさり消えてしまった。まるでお化けだ。

本当は剣治が新しい身体を千夏姉さんにあげる約束だったらしいが執事さんにばれてしまい駄目になったそうだ。ほとんど聞いた話だから本当かどうかかわからないが多分本当であっている気がする。

僕も朝食を食べに行く途中で執事さんに会った。

「時雨様、おはようございます。」

「おはようございます。」

近頃の日課である。いつもそういつたら仕事をしにどこかに行くのだが、今日は違った。

「……今日は大変な一日になるかもしれません。」

「大変な・・・一日？」

聞き返したが執事さんは頭を下げ、去って行った。考えていても仕方ないので朝食を食べにいく。第二次林檎の取り合い合戦が行われており、未だに決着はついていないようだ。

「蕾殿、悪いが貴女の林檎は私がもらおうか？」

「貴女にあげれる林檎は毒林檎だけよ！」

睨み合う二人。それを眺める一人のメイドさん。

「早く食べないと遅刻しますよ？」

うーん、確かに大変だ。

「・・・二人とも、僕の林檎をあげるから早く食べてくれよ。」

二人の胃袋という海に僕の林檎は消えた。帰ってくることはないだろう。

「行つてきます。」

学校に向け蕾と一緒に歩く。蕾を見てなかったから身長が少し高くなったようだ。

「兄様、今度一緒にどこかいきませんか？」

蕾は目をキラキラさせながら僕に聞いてくる。

「うん、どこがいいかな？蕾は何処に行きたい？」

ここで魔界、天界、地獄と言われたら僕は断る事が出来るだろうか？だが、蕾はいたって普通の答えをだした。

「水族館はどうか？」

「ああ、いいよ。」

ガッツポーズする蕾を見ると心が和む・・・事はないな。目が燃えている。しかも喋り方がおかしかったような・・・。

じーっと蕾を眺めていると顔が赤くなった蕾に叩かれた。

「・・・兄様、そんなに見られたら照れるよ！」

ばしっ！

「ごめん。」

そんなやり取りをしていたらもう少しで学校である。何度見たつてでかい。大体車が廊下を走るのはおかしい事ではないのだろうか？さっきからリムジンが行ったりきたりしているし、SPみたいながつしりしたサングラスの男達がうろろしているような気がする。

「蕾、今日なんかあるの？」

わからないことは他人に聞くのが一番だ。

「えーとね、偉いとこのお嬢様が転校してくるんだって。」

僕たちがきたときはこんなことしなかったような気がする。

「でね、魔女なんだって。古代魔法も使える程の腕だってよ！異名は兄様みたい名前だったけど忘れちゃった。」

「ふーん、魔女ねえ。」

魔女Ⅱ高飛車な知り合い。

「僕の知り合いに魔女ならいるよ？少し性格が悪いけどね。」

「へえー凄いな。今度紹介して！」

彼女は只今魔界で仕事してます。

「・・・まあ、会えたらね。」

「やれやれ、時雨君朝から妹さんと仲良く登校かい？」

剣治が白馬に跨がって登場。なにやってんだこの生徒会長は。

「・・・剣治、今すぐ馬からおりてくれないか？」

恥ずかしいなあ。蕾なんか走っていったよ。

「ふっ、わかったよ。君の頼みだ。」

馬は走りさり、どこかに行ってしまった。

「逃げたけど大丈夫？」

「大丈夫、家に帰っただけさ。」

「…………犬じゃあるまいし。」

「今日は転校生がやってくるよ。聞いたかな？」

「うん、魔女だって聞いたよ？それも凄腕魔女らしいね？よくわかんないけど古代魔法とやらも使えるそうだね。イクスさんとどっちが強いかな？」

剣治はニヤリと笑いながら答えた。

「同じだと思うよ。」

教室は大騒ぎ。ハデスに話し掛けるとハデスも嬉しいみたいだ。

「おにーちゃん転校生だってよ！」

「うん、そうだね。」

このハデスは本物であってほしいな。ハデスは話題を変えて魔界での事を話してきた。

「おにーちゃんベリルに勝ったんだって？」

「うん勝ったよ。」

ハデスが指を鳴らすとがたいのよろしい男の人がワゴンを押して入ってきた。静かになる教室。無理もない、ワゴンの上には沢山のオレンジジュースが乗っているからである。

「おにーちゃんにプレゼント！」

たーんたーんたたーんたたたたんたたん

そんな音楽が流れるなか、ハデスは僕に大量のオレンジジュースを渡してくれた。渡される瞬間、教室から拍手が鳴り響いたのがなんとなく凄いと思った。（拍手をしている中に先生までまじっていた。）

オレンジジュース授与式はしめやかに行われ、次のプログラムに移った。

教室の前に先生が立ち、転校生が来た事を告げる。

「えー、みんなには黙っていたが今日から新しく仲間が増える。」

あれだけリムジンやらグラサンの男の人がうろついてたら普通変に思わないだろうか？

「外国人だ。名前はイクス・リベナ・マツカローニさんだ。イクスさん、入って来てください。」

へえーどこかで聞いた名前だなあ。

ガラッ！

何となくツンツンしているような雰囲気を出しながら銀髪の美少女が入ってきた。

剣治は僕に笑いかけた後、手をメガホンみたいにして叫んだ。

「イクスさんはツンデレだー！」

ざわっとなる一部（数少ない男子である。）次の瞬間、剣治は水浸しになった。啞然とする教室、だが僕は見た。イクスさんがチヨークを持って剣治に向けて口をぱくぱくさせたのを。

隣の席の亜美さんもイクスさんを見ている。彼女も気がついたの

だろうか？

「つ、ツンデレですって？」

なんか違うところで驚いてる気がする。

剣治は服を乾かしにどこかに行った。先生がイクスさんに自己紹介をさせる。

「私の名前はイクス・リベナ・マツカローニですっ！みんなよろしくね？」

か、変わり過ぎている。そんな事を考えていると近くにいた男子が立ち上がり自分の顔に手をかけ剥がす。中からなんと剣治が登場。教室は一時騒然となる。

「猫被らないでほしいな。ツンデレ魔女！」

バツシャーン！

剣治がまた水浸しになり教室を出ていく。

イクスさんはみんなにわらいかけ次の自己紹介に入った。

「私はあんまり身体は強くありませんが頑張っていきたいと思えます。みんなと会えたのも何かの縁です。よろしく願いしますね？」

パチパチと拍手が飛んだが・・・。

廊下側の窓が開き、剣治が顔を出す。

「嘘はその性格だけにしたいな！ツンツン魔女っ子。本当は・・・」

そこまでいつて剣治は洪水に流されて廊下からいなくなった。後には静かになる教室が残された。

そしてイクスさんは最後に続けた。天使の微笑みという奴で・・・。

「・・・みんな！よろしく！テヘツ？」

教室の一部が泣いて喜んだのは間違いないだろう。その時、窓の外から紙ヒコーキが飛んで来てイクスさんの目の前に落ちた。

彼女がそれを拾いあげ広げた。何か書かれているようだ。窓の外には剣治が立っていたので書いたのは剣治で間違いないだろう。イクスさんの顔が固まった。銀髪が怒りに燃えている。外は急に曇り出し、イクスさんは先生に告げた。

「少し緊張したからトイレにいつてきますね？」

有無言わずに教室を出るイクスさん。その後、剣治が何か青い液体状の生物から逃げたのを目撃したのは僕だけだと思う。帰って来たイクスさんは少し残念そうな顔だった。つまり剣治に逃げられたみたいだ。

「さて、イクスさんの席はどこがいいかな？」

この教室は人数が少ないので所有者がいる机は少ない。（ほとんどの男子の隣には誰も座っていない。）祈るように目を閉じる男子達。

「そうだ！イクスさんは剣治と知り合いか？」

首を横に元気よく振るイクスさんはニヤリと笑った。

「いいえ、あんな方は知りません。私が知っているのは……。」

そんなに僕を見ないで欲しい。

「なるほど。」

先生がそれに気付く。当然、教室のみんなも僕を見る。僕は教科書でそれを塞ごうと努力した。特に痛かったのは男子からの殺人光線である。（それから僕に話し掛ける男子はあまりいなかった。）決定したかと思ったが、僕にはまだ切り札がいる。そう、僕の隣には亜美さんがいるのだ！

「あ、隣は空いてないな……。」

勝った！だが甘かった。あんパンにイチゴジャムつけるより甘かった。

「……じゃあ反対側に机をつけます。」

「そうか、じゃあそうしよう。」

左から、窓、亜美さん、僕、僕たちは最後尾なので僕の隣には誰もいない。

敗北それは友に捧げるレクイエム。そんな事を考えていたらイクスさんがやってきた。おまけで机がついてくる。そして僕の隣に座り、右手を差し出してきた。

「よろしく、時雨さん。」

「……どうも。」

右手を掴もうとしたら亜美さんが叫ぶ。

「しーくん駄目だよ！罨だ！」

え！

なんとみんなが見ている前で僕にキスしようとしたのだ。しかし、亜美さんが言ってくれたので避ける事に成功。だが、男子は僕を睨んでいる。明日まで生き延びる事が出来るだろうか？

「うふふ、挨拶よ。」

「うんうん、時雨君挨拶だよ。」

剣治がいつの間にか机に座っている。

まだまだこれから苦労は続きそうだ。

ちなみに紙ヒコーキにはこんな事が書かれていたらしい。

『ぶりっこ魔女！参上！！』

意味が全くわからないのは僕だけだろうか？

そのいち！！ ツンツン魔女が猫を被ると剣治はながされる？（後書き）

やばいです。非常にやばいです。まだ夏休みの宿・・・なんでもないです。さて、前作はめっちゃファンタジーになってたんで起動修正してみました。意見をくれてありがとうございます。初心に帰る為に転校させようか迷いましたが、止めました。という事で代わりに誰か転校させてきました。どうだったでしょうか？

それに 時雨の休める場所は学校ではない。

彼女、イクス・リベナ・マツカロー二さんがきてから1時間が過ぎた。教室のみんなは彼女を質問責めにしていて身動きが取れないみたいだ。僕はみんなの邪魔にならないように亜美さんと剣治と一緒に廊下で話をしている。廊下にはまだ魚がピチピチ跳ねていたり、海藻なんかが落ちている。先程剣治を流した時の魔法の忘れ物である。

「しかしまあー時雨君も大変だね。」

自分には関係ないというふうに剣治は言う。

「剣治がしーくんを魔界に送るからあんなのがくるのよ。」

剣治から事情を聞いた亜美さんは文句を言う。

「まあ、大丈夫だよ。案外いい人だから。」

僕は出来れば魔界の話はしたくなかったが、剣治が話してしまったので今は別によかった。

廊下に新たな人物がやってきた。

「時雨さん、探しました。」

イクスさんである。剣治はニヤリと笑いながら見ている。亜美さんは……何故か僕の前に出た。

「あらどなたかしら？」

当然だとばかりにイクスさんは亜美さんに尋ねる。

「私はしーくんの第一の友達と・・・席の隣人！そして断罪天使の霜崎 亜美よ！」

剣治はかなり笑っている。しかし亜美さんは構わずに続ける。

「・・・あんたこそ何者よ？古代魔法が使えるらしいけどどんな魔女さんよ？魔女なんか宅急便やってればいいのよ！」

何となく一雨きそうな雰囲気である。今日の天気は快晴だったはずだ。

「古代魔法が使えるようになったのは・・・時雨さんのおかげよ。」

亜美さんが？という顔をする。イクスさんはまだ続けるようだ。僕が逃げようとしたら剣治に捕まった。

「・・・逃げちゃ駄目だ！」

一言呟き僕を離れた。そしてイクスさんは遂に喋ってしまった。

「私、彼と契約したの。勿論紙じゃなくてあっちでね。」

愕然となる僕。これ以後亜美さんは僕を無視するだろう。だが、亜美さんは僕の知らなかった真実を話し出した。（剣治は知っていたらしい。）

「私だって・・・しーくんと契約したもん！」

知らなかった。僕したかな？イクスさんは僕に尋ねてきた。

「時雨さんそうなの？」

「う、うーん？わかんないなあ。」

亜美さんが口を開く前に剣治が話し出した。

「時雨君が屋上で気絶していた時に亜美は契約したのさ。だから時雨君はその事実を知らなかった……。なんなら証拠のビデオを見せようか？」

もし、将来僕が警察になったら真っ先に剣治を盗撮の疑いで逮捕するだろう。更に亜美さんは続ける。

「……。それにしーくんが滅多にしないしない授業中の居眠りの時してるもん！」

剣治が今度は写真を取り出す。

「ちなみに証拠写真もあるよ？」

……。捕まえた後は余罪も追求しておかないといけないな。

イクスさんも負けてはいない。

「ふうん、だけど私は意識があるときにしてるもんねえ！」

ここで授業が始まるチャイムがなり、一旦終了となった。まあ、引き分けというところかな？　だが決着をつけたらしい。授業中、ふと亜美さんをみると段々こっちに近付いているのだ。そしてイクスさんにいたっては何かの粉をまぜている。（美奈さんに昔飲まされた事がある眠り薬みたいだった。）

ある意味嬉しいが実際は困るだけである。すでに亜美さんは僕に隙が出来たらするつもりだ。そしてイクスさんはハデスからもらったジューズの中に入れようとしている。剣治に助けを求めると彼は真面目に勉強していた。頼れるのは自分だけ。僕は手を挙げ先生にいった。

「先生！頭が痛いです！身の危険感じるから保健室にいったいいいですか？」

「ああ、いいよ。」

もう一人手を挙げる人物がいた。剣治である。

「じゃあ生徒会長として彼の付き添いをします。」

更に二人手を挙げたがこれは却下された。

「先生！私も天道時君の付き添いしていいですか？」

「一人で充分だろ？」

こうして僕は教室から出る事に成功したのであったが、一つ忘れていた。途中で剣治は戻って行った。彼なりの優しさだろう。保健室の扉を開け、先生にベットに寝ていいか尋ねる。

「ご自由に。だけどこれから僕は少し居なくなるから保健委員を連れてくるよ。」

先生がでていき静かになってからベットにダイブ！だが、それは

間違った行為であつた。ベットに乗った瞬間、白いシートが僕を飲み込んだのだ。

「うふふ離さないわよ時雨君？」

「その声は・・・舞さん！」

忘れていた。彼女は保健委員であつた。だが・・・

「来るの早過ぎじゃないんですか？」

「テレポートしてきたの。うふふ。誰もいないからいろんな事ができるわよ？」

シートが取れて白衣の学ランを着た舞さんが現れる。

「いや、別にしないでいいよ！」

僕は跳ね起き、走って保健室を後にした。もう少しで教室である。なんと剣治が窓から飛び出してきた。僕に気付き手を振る。

「時雨君、危ないから逃げたほうがいいぞ！」

剣治はこっちに走ってきた。そして向こうからは濁流がこっちに向かつて流れてくる。間違いなくイクスさんが唱えた魔法だろう。僕も回れ右をして走りだし、隣にいる剣治に聞いた。

「剣治、今度はなんていったの？」

「・・・普段はツンツンしてるくせに今は猫ちゃんか？と言ったらこうなった。」

後ろからは濁音が轟くが剣治は止まり、後ろを向いた。

「・・・流石時雨君と契約して手に入れた力だな。だが、怒りに

任せてるから無駄だな。」

多分、怒らせたのは剣治ですが？

『我は、天界、魔界を守護する孤高の罪人。』

剣治に紫の羽が生える。

「見ていたまえ！これが罪人天使の本気だ！」彼の右腕には紅いハリセンがそして左腕には蒼いハリセンが出現する。

迫り来る濁流にハリセンをぶつける。

バシン！

濁流は消えた。あのハリセンでツツコミしたらボケは跡形もなく消えるに違いない。

「ま、ざつとこんなものだよ。」

天使化を解いた剣治は呆然としている僕に話し掛ける。

教室に戻ってから少し経ち授業が終わった。次は移動教室だからみんなが理科室に移動し始める。なかにはリムジンを呼びそれに乗っていく人もいたが僕は違っていた。ちなみに歩いていないし、羽を生やしているわけでもない。

空とぶほうきに乗っているのだ。

「時雨さんどうですか？私のほうきは？」

「ははっ、凄いですね！」

子どもみたいだが、楽しいんだからしかたないだろう。

「く〜！負けたのがくやしいよ！剣治、なんかだして！」

「おいおい、僕はドラ もんじやないから無理だね。」

下では走りながら会話している亜美さんと剣治がいる。それから僕はイクスさんの後ろに座ってイクスさんをしっかりと掴んでいる。

「時雨さん、もうちょっとしっかりと掴んでないと落ちますよ？」

「あ、うんわかった。」

ちなみに僕はイクスさんの肩を掴んでいる。そして肩に力を込める。

「そういう意味ではなくで私にしがみついて下さい！そうしないと落ちますよ！」

仕方なくイクスさんの腰より上に腕を巻き付ける。

？ 柔らかい。

「し、時雨さん。どこ掴んでいるんですか！」

・・・・・・テヘツ。

「す、すいません！」

僕は千夏姉さんに意見する。

「ちょっと千夏姉さん何やってるの！」

「時雨がお約束をしないから私がやってあげたの。大きさはまあまあね。」

未だ掴んでいた手を離す。

「あ、時雨さん今離したらおちますよ!」

後の祭である。僕はほうきから落ちて床に……。突撃せずに天使用した亜美さんにお姫様抱っこの状態でキャッチされた。何と無く恥ずかしいな。

「へへーん、貴女のお陰で時雨君を奪還できたわ!そのまま黙っておけばよかったのにな?」

すぐ上には亜美さんの顔がありつい目をそらしてしまう。

「ううう。黙って飛んではよかった。」

「あの、二人ともすでに理科室は後ろにあるけど?」

授業を告げるチャイムがなり、後で先生に怒られたのは変える事のできない真実であった。そして昼休み。亜美さんとイクスさんはどこかに消えた。亜美さんは大体昼休みはいないがイクスさんまで居なくなっただから教室のみんなは残念そうだった。

「……うーん?どこかで弁当食べてこようかな?」

教室をでると薔が教室の近くに立っていた。

「兄様!一緒にお弁当食べよう?」

学校で薔とお弁当食べるのは初めてである。何故なら薔とはクラスが違うし、普段薔は亜美さん達とどこかに姿を消す。

「うん、いいよ？じゃあ何処で食べる？」

蕾は高い所が好きだから屋上かな？

「えつとね、じゃあ中庭！」

「あの蕾ちゃんが甘えてる！かなり珍しいわね？誰、恋人？」

「知らないの？あれは蕾のお兄さんよ。」

「え、だって歳同じだよ。双子？」

「蕾は養子だつてさ。」

「まあ、なにせよ男子にきつい蕾ちゃんが甘えてるなんてそんなにいい男かしら？顔は少しカッコイイかな？身長も高いぐらいだし。性格は・・・優しいそうね。」

「うん、彼は優しすぎるそうよ。この前なんかお婆さんが困っていたら一緒になって困って手伝っていたぐらいだから。」

僕は蕾の隣に座りお弁当をひろげるが・・・。

「あれ？」

中にはあまり入ってなかった。

「兄様早弁したの？」

身に覚えが全くない。

「いいや？してないのに減ってるなんておかしいな。」

多分これだけでは足りないだろうな。午後は苦しみながら授業を受けるはめになるんだろうなあ。そんなことを考えていたら目の前にお弁当が出てきた。

「・・・兄様、今日たまたまお弁当自分で作ったんだ！でも美奈さんが作ったのを私食べるから兄様にあげるね？」

なんて優しい妹なんだろう。まるで仕組んでやったとは思えない。

「うん！ありがとう蕾。」

こういった妹が作ったお弁当はまずいらしいが蕾は料理がじょうずであった。

「おいしいなあ。やっぱり蕾は料理が僕よりうまいな！」

僕は感動しながらお弁当を食べている。

一方、屋上では戦いが繰り広げられていた。

「亜美さん、私と戦ったって敗北しか残りませんよ？」

魔女姿のイクスは白い羽の亜美に告げる。

「そっくりそのまま返してあげます！」

まあ、普段は蕾や焰がいるのだが、今回は二人の決闘を審判する焰しかない。蕾は用事があると言って居なくなった。

僕はお弁当を食べ終わり、のんびりしていた。雲が通るのをゆっくり眺めるのもたまにはいいものだ。

「……兄様、今朝の約束覚えてる？」

「うん、水族館だね？」

久しぶりに水族館に行くのは楽しみである。蕾と話していると上のほうからなにやらふってきた。

「雨？」

しかしそれもすぐになくなりまた辺りは太陽が照らす。お弁当を食べてから少し蕾と話した後、僕は教室に戻った。教室にはあまり人がおらず、僕の隣人さん達は机に突っ伏していた。しかも二人とも濡れているのだ。

「どうしたの！」

「いや、暑かったから私がイクスさんに雨をたのんだんだよ。」

「うん、そうです。」

しかし濡れたままでは風邪をひくので僕は彼女達を保健室に連れていき、別の服に着替えてもらった。

保健室の前で待っていた僕は何故か想像していた。

やっぱり体操着かな？それとも……。

この学校の女子の制服は変わっており、上は男子の学ラン下はスカートである。そして学ランの色は自由である。（僕の学ランは色

々ありボロボロになっっているので今は転校する前着ていた黒い学ランである。）亜美さんは緑色の学ランを着ていて、イクスさんは青い学ランを先程まで着ていた。

そして保健室からでてきた二人は体操着ではなく白い学ランを着ていた。

「・・・白い学ランなんて初めてだから恥ずかしいな。」

「うーん、白いのは少し落ち着かないですね。」

似合ってるなあ。

二人と一緒に教室に戻る。ちょうど昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。それから放課後までいたって平和であった。なぜなら二人とも疲れたのか眠ってしまったからである。

放課後は理科室の掃除が待っている。

それに 時雨の休める場所は学校ではない。(後書き)

なんか最近色々大変です。さて、今回は前回の続きみたいになりましたがいかがでしょうか？まあ楽しんでくれたら書いてる僕も嬉しいです。未だ文章力がまだまだですが出来ればこれからもうよりしくお願いしますなり。次は理科の先生から罰として理科室の掃除をもらった三人の努力を書きたいと思います！

そのさん 理科室、それは悲劇の宝箱。

さて、放課後。僕たちはほうきをもって理科室を掃除している。ちなみにイクスさんは愛用のほうきである。二人は理科室をして僕は理科準備室の掃除をしているのだが、かなり汚い。棚の中には無造作に色んな薬？や液体が入っていてぐちゃぐちゃになっている。」「・・・なかなかこの引き出し開かないあ。えいつ。」

その衝撃で上から液体の入ったびんが落ちてくる。僕は人体模型に阻まれて避けることは出来なかった。バシャーン。

液体が僕の頭から身体を濡らす。
最後に空の瓶が頭にあたり僕は気を失ったのだ。

目を開けると誰かにひざ枕されていた。

「・・・うーん？」

「あ、気が付いた？」

「よかったあ。」

立つてみると亜美さんとイクスさんが僕を見下ろしている。・・・
なぜだ？彼女達はこんなに背が高くないぞ？

「あー。僕の名前は何かな？もしかして時雨とか？」

亜美さんが言っている事がよくわからないな。

「うん、僕は時雨だよ。」

イクスさんに抱き上げられてから自分がどうなったかわかった。

「か、身体が縮んでる！」

まるでコナ である。

イクスさんは僕の顔にほお擦りしながら亜美さんに話し掛ける。

「かわいい〜。時雨さんが小さくなっちゃった！」

やばい状況には間違いない。てかこの人は何をやっているだ。

「あ、亜美さん！」

助けてください！

「やめてあげなよ。しーくんが可哀相よ。」

伝わった！うれしいなうれしいなあ！

「私にも抱かせてよ。」

意味がねえー。かなしいかなしいな。

僕は二人の玩具にされ、色々な事を言われた。

「あの、亜美さん？」

「しーくん亜美お姉ちゃんと呼ばないと駄目よ。わかった？」

「じゃあ私はイクスおねえたんね？」

おねえたん？何だそりゃ？

「ほら早くいつてしーくん！」

やけくそだあ！

「わかりました！亜美お姉ちゃん！」

恥ずかしい！だが、まだ残っている！

「早くしーくん！私にも言つてね？」

「わかってます！イクスおねえたん！」

うん、こっちのほう恥ずかしいな。

「時雨君も小さくなつたら可愛いものだな。」

誰だ！誰だ！だれだあゝ！廊下の近くに光る影、赤いがーくらの剣治だ！。

「さて、二人はまだ掃除が終わつてないだろう？君達は早く掃除をしないと怒られるよ。わかつたかな？」

「ぐ、わかつてるよ！」

二人は最後に僕を抱きしめて理科室に戻っていった。

「剣治、助かつたよありがとう。」

ありがたいな剣治は普段の僕と変わらずに接してくれ……………

「ふ、剣治兄様と呼びなさい。」

なかったか。

「冗談だ。君は今ひまかね？ひまならついてきてほしい所があるんだが……どうかな？」

返答に困っていると剣治はある条件を出してきた。

「元に戻りたくないなら別にいいんだよ？今から行く所はもしかしたら君の悩みを解決してくれるかもしれないな。」

「わかった！行くよ！行かせてもらいます！」

満足そうな剣治を見上げるのは少々憂鬱だったのは誰にも言わないだろう。

そして僕が案内されたのは冥土喫茶である。

「実はこのメイド長はそういう訳分かんない事を意外に知っているんだ。僕も昔は頼ったもんだよ。……さて、中にはいろいろか？」

今日は普通に鍵があき、中にはメイドさんがやはり沢山いた。そして剣治を見てさっさと先闘体制に移行。殺伐とした店内に流れる不釣り合いなのんびりした音楽が戦いのBGMになるかもしれない。だが今日、剣治は戦うつもりはないようだ。

「今日僕は遊びにきたんじゃないんだよ。ごめんね？」

「嘘言わないで下さい！」

当然、剣治を信用するメイドさんはいない。中には更に警戒を強めるメイドさんもいる。

「やれやれ、そんなに遊びたいならこの時雨君ミニバージョンと遊んでくれ。はいプレゼント。」

体重の軽くなった僕を掴み近くのメイドさんに放り投げた。

「うわっ！」

「きゃああー！」

メイドさんに上手く抱きしめられたので怪我はなかった。

「剣治、投げないでよ！メイドさんに迷惑がかかっただろう？」

「さて、ね？どうかな？」

そういつて剣治は僕を置き去りにして奥の部屋に入ってしまった！僕も慌てて追い掛けようとしたがそうは問屋がうるさなかった。

「受け止めてくれてありがとうございます。」

メイドさんから離れようとしたが、離れることができない。メイドさんを見ると僕をはなそうとしていなかった。

「僕、名前は？」

「天道時 時雨ですよ。たまにここにきてましたよ？忘れちゃったか？」

僕は今の状態を忘れていたのである。
何故かメイドさんは僕を抱きしめた。

「時雨様が小さくなったらかわいいな！ほらお姉さんて呼んでみてくれないかなあ？」

只今僕はそれどころではありません！柔らかななにかで窒息死しそうです……。

そして辺りのメイドさんが騒ぎだす。ギャーギャー騒いでいるのだ。しかしそれはすぐにおさまった。何故なら……。

「均等に触りましょう！まず時雨君をみんなの中心に設置して！」

ここでも玩具扱いである。

写真をとられたり抱きしめられたり色々されたり大変だった。そして最後のほうつまり新人メイドさん達の所になった。まず一人目のメイドさんは知り合いであった。

「時雨様、お久しぶりです。」

「零ちゃん！元気だった？」

うーん、大きいな。……あれも変わらずでかいが身長も今の僕より大きいな。そして零ちゃんはやっぱり普通の質問をしてくれた。

「なんでそんな小さくなったのですか？」

僕はついでに全員に事情を説明、納得してもらった。（中には剣治がおもしろ半分僕を小さくしたと思っている人が何人かいた。）

「大変ですねえ？」

「うん、大変なんだよ。」

二人で話していると後ろからメイドさんが姿を現した。そこで零ちゃんとの話は終わりまたいろんな事をした。

最後のメイドさんが終わり、ちょうど剣治が出て来たので今日は帰る事にした。

「またきてくださいね？小さな時雨君。今度はぎゅっと抱きしめてあげるからね？」

いやいや、気持ちだけで結構です。今日知りました。人間を殺す事が得意なのはあれがでかい人ということ。

剣治の話によると少しの間はこのままでいいといけないそうだ。
・・・・・・・・・・疲れると思うのは僕だけかな？

剣治と別れ、走っていえに帰る途中誰かにぶつかった。

「すみません！大丈夫ですか？」

「あたたた。大丈夫よ？僕こそ怪我ないかな？」

あれっ？どこかで見た顔だな？しかし・・・・・・・・。

「あ、しなか。やっぱり大きくなったのか！」

しなはキョトンとして僕を眺めている。

「僕だよ、時雨だ。」

「・・・・え。嘘！大きくなりすぎたかな？やっぱりマリのキノコでは駄目だったかな？」

しな に事情を説明。ふうんと頷き僕を抱き上げた。

「こんなに可愛くなっちゃってさあ。……誘拐しちゃおうかな？」

「おいおい、前科があるから罪は重いぞ？」

笑う しな は僕を家まで送ってくれた。

「じゃあ明日学校でね？」

「うん、また明日ね？」

しな は走って帰り僕だけが残されたが……。

「……ありえないな。転校生が二日連続でくるなんて……」

うーん、明日も大変な一日になりそうだな。

「ただいまあ。」

「おかえりなさい時雨様。」

そして美奈さんは仰天。

「し、時雨様がミニになってるー！」

執事さんも仰天。

「時雨様がチビなってるー！」

僕たちの視線に気付き咳をする執事さん。

「……コホン、事情は剣治様から聞いてます。」

そういつて引っ込む執事さん。よほどはずかしかったのだろうか

あ。僕が考えていると美奈さんに抱えられた。

「うーん、めっちゃかわいいですね。食べたいぐらいですね！そうだ！今日は時雨様のフライにしましょうか！」

非常に残酷である。一瞬だけ想像しようとしたが僕の脳内細胞がモザイクをかけたので時雨のフライはよくわからなかった。

「冗談ですよ。冗談！」

貴女の顔は笑ってますが目が獲物を捕えた獣みたいになってますよ？

「……やっぱり生ですかね？」

「はい？」

かぶつ。

耳たぶを美奈さんにあまがみされた。

「ちょっとなにやってんですか！」

だが、美奈さんは止まらない。抵抗しようと腕を動かそうとしたらその腕を掴まれた。

「小さいから力があまりないですね！」

そしておろしてくれた。

「うふふ、悪戯っ子なメイドを許して下さい、御主人様。」

「あはは。いいよ別に。」

今更玩具にされても別にいいや。だが、さっきの美奈さんは恐かったな。

「ねえ、美奈さんシャドさんはどうしたの？」

「貴方の影は『黄金の林檎』を探しに旅に出ましたよ？なんでも時雨様にプレゼントするだとか・・・。」

今、守って欲しいなあ。そんな時扉が開き蕾が帰って来た。

「ただいま！」

「あ、お帰りなさい蕾様。ご機嫌ですけど何かあったんですか？」

「えへへ。実は・・・。」

僕を見て固まったがすぐに解凍。

「兄様？」

「うん、そうだよ？どうしたの？」

「兄様がどうしたの？小さくなってしまって・・・。」

本日何回目になるだろう・・・僕は事情を説明したのであった。

「大変だねえ！じゃあ私が兄様の世話してあげるね？」

「大丈夫だって！自分の世話は自分でできるよ？」

今日の蕾は折れなかった。

「うっん！普段私に優しくしてあげてるから今日は私が手伝ってあげる！」

仕方ないなあ。

「わかった！僕の世話は任せるよ。」

間違いそれは後で気付くものである。僕は明日になってそれに気が付いた。

そのさん 理科室、それは悲劇の宝箱（後書き）

やれやれ、時雨君が小さくなりましたね。小さくなったらみんなかなめられますね！さて、これから小さくなった時雨君のいじられ生活が始まります。

そのよん 小さくなったらやはり恐怖！

小さくなつた僕は只今勉強をしています。身体は子ども。頭脳はちゃんとした高校生です。

カリカリカリカリ。

「・・・わかんないなあ。蕾に聞いてこよう。」

今の自分には高い椅子から降りて歩きだす。蕾とは学年が同じだからこういう場合はかなりうれしいですな。

だが、部屋には蕾はいなかった。

「あれ？蕾がないなあ。トイレかな？」

蕾のフカフカベットに腰掛ける。そして床に一冊の本が転がっている。どうやら文庫本のようなものである。

題名は・・・。

『義兄の口説き方 第一。』

とても変わった題名の本である。内容は・・・。

『「今日、義兄ちゃんのお弁当を掠め取り、少し中身を食べました。そしてちゃっかり私の作ったお弁当をあげました。」』

うーん、大胆だなあ。てか、普通ばれるだろう。ばれなかったのかな？

『「義兄ちゃんは今全く気が付かずに私の作ったお弁当をおいしいと言ってくれました。」

』

ばれてないみたいだなあ。この義兄さん、ぬけすぎじゃないかな？ほんとにこんな人いるのか？いたらあってみたいな。

「あ、兄様。珍しいね？私の部屋にくるなんてさ。」

蕾が部屋に入ってきた。そして僕が持っている本に目をとめる。

「に、兄様！その本読んでたの？」

「う、うん！読んでたけど悪かったかな？」

無言で僕の近くに立ち、本を取り上げた。

「こ、子どもが見るもんじゃありません！」

「僕は子どもじゃないよ！」

もっ少しで十六だ！

「わかってるよ！」

蕾が涙ぐむ。僕は慌ててあやまった。元は僕が勝手に読んだのが悪かったから仕方ない事であり、蕾が泣いてる姿はあまりみたくない。

「ごめん！僕が悪かったよ！」

蕾の涙が消え、笑顔になった。

「もういいよ。私が床に置いとくのが悪かったから……。ところで兄様何かようかな？」

ああ、物語に夢中で忘れていた。

「実はこの問題がわかんないんだ。蕾、わかるかな？」

「ああ、ここはこうしてね？それから……」

蕾先生の講義により理解を得た僕は我が陣地（自分の部屋）に戻り、夕食まで勉強を続けた。

そして夕食。

「ほら兄様口開けてよ！」

蕾は僕の前に陣取り、僕に食事を食べさせている。

「うー、わかったよぉーあーん！」

箸で摘んだエビフライが口に入らずに僕の鼻に当たる。

「うーん、やつぱり大きかったかな？……これでいいかな？じやあ兄様あーん！」

「……あーん。」

このような恥ずかしい光景は夕食が終わるまで続けられたのだっ

た。だが、大変なのはこの後である。

夕食を食べ終わり、お風呂に入る事にした僕は着替えを持ち浴室に直行しようとしたら蕾に抱き上げられ無抵抗で非力な子どもとなった。

「・・・兄様は私がお風呂にいれてあげるよ。」

有り難いが迷惑きわまりない行為かもしれない。

「大丈夫だつて！」

だが、僕はそのまま蕾にラグビーボールみたいに抱えられ浴室という名のゴールにタッチダウン！

「さあ、兄様服を脱ぎましょう！」

「わー！やめてよ！自分で出来るから！」

めいいっぱい抵抗したが無駄にカロリーを消費しただけであった。今の僕はまるで裸の王様、股間を両手で押さえている状況である。そして・・・。

「つ、蕾！何やってるの！」

「兄様こそ何言ってるの？お風呂は服を脱いで入るものだよ。」

た、確かにそうだが・・・。そうだ！昔使ったあれを使おう！

「それに二人はきついよ！」

「今の兄様なら充分入れますよ。」

うぐ、しまったそうだった！僕は蕾がさつさと服を脱ぎ出したので風呂の中に逃げ込んだのだった。

「兄様、何やってるの？昔はよく入っていたじゃない。」

昔は昔。今は今。人間割り切りというものが必要である。

「だ、だつてさあ！」

有無言わずに僕を引き寄せ抱きしめる。

「うーん、私が抱きしめれるぐらい小さくなるなんて兄様かわいい。それにプヨプヨ柔らかいしなあ。」

「ちょっと蕾、当たってるって！」

だが、蕾は自分の世界に旅だつてしまった。

「うふふ。兄様、今から甘えるねえ。」

おいおい、今の僕が蕾に甘えられたら次のような事になるだろう。

『ぐふあ！マスター、甘えるねえ？』

『あはは、ドラゴン、君に甘えられたら僕はぺっしゅんこだよ・・・』

『マスター！』

『ぎゃあああああー！』

・・・救急車をよぶなら何番だったかな？

「兄様へ。」

僕の番がきたようだ。思えばこの土地では色んな事があったなあ・・・。

ムギューーーー。

「あーーーーー（すでに諦めモード）」

つ、蓄のあれが当たってるって！

『た、隊長！大変です！鼻から燃料が漏れる危険が出てます！』

『何い？急いで脳内細胞に冷却装置を送りこの状態を食い止めるんだ！』

『了解！これより冷却装置を送ります！』

プシュー。

『隊長、なんとか止まりました！』

『そうか御苦労だったな。だが、油断はできないぞ？』

「あ、危ない危ない。」

僕は自我を保ち、蓄をこつちの世界に連れ戻した。

「おい、蓄。体洗わないといけないよ！」

はつとした蕾は立ち上がる。

「うつ！」

何もつけてない！

『た、隊長！またやばいですよ！このままでは燃料だけでなく意識が閉店する可能性が出てます！』

『くつ、脳内には先程通り冷却装置を送れ！意識には気合いを送って阻止するんだ！』

僕は自分の頬にパンパンと気合いをいれた。

「さ、兄様も身体洗ってあげるからこっちきてよ。」

「・・・蕾、今君がしているのは間違いなく自分から僕を引き寄せてないかな？」

結局、僕は蕾に身体を洗われるみたいだ。

「さあ、兄様身体を綺麗にしようね？」

「アハハ、いいよ！僕ひとりでできるもんっ！」

「うふふ。甘いわよ兄様。そーら、いうこと聞かない悪い子を捕まえちゃった！」

「うわあああああ！」

「・・・その後、僕の身体は隅々まで綺麗にされた。そりやもう隅々とな・・・。身体を洗った後、さっさと出ようとしたが、や

はり蓄に捕まってしまいオダブツなり・・・。

「さあ、百まで数えようね?」

「はいはい、 $5 \times 5 = 25$ 。 $10 \times 10 = 100$ 蓄先生、数え終わりましたよ。」

「早っそんなもって意味分かんない数え方してない?

「蓄先生、近頃の子どもはみんなこうしてます!だからお風呂からあがっていいですか?」

流石の蓄も頷くしかあるめえ。

「うーん、しょうがないなあ。分かった、あがっていいよ!」

ふ、今回は僕の勝ちだな。今日は早くベットに入り寝よう!蓄があがってくるまえに!

蓄より早く着替えた僕は自室のベットにダイブ!出来なかった。何故なら大量のトラップ?みたいなものがベットの上に置いてあるのだ。

「・・・なんだこれ?」

考えていると誰かに抱き上げられた。

「これじゃあ、流石の兄様も安眠出来ないから私のベットで寝よう?」

「いやっ、別にいいよ。執事さんと一緒に寝るからさ!」

蓄は悲しそうな顔になり、泣きそうな顔になってしまった。

「冗談だよ！わかったからね？泣かないでさあ。」

「な、泣いてないもん！目に虫がはいっただけだもんっだ！」

やれやれ。

言葉とは裏腹に僕をさらい、蕾の部屋に監禁。僕はベットに蕾と一緒にダイブ！

「えへへへ。抱っこしてあげる〜！」

あははー。遠慮しますよ！だけど声を出して言えない僕がここにいる。

「今日は私に甘えていいよ？兄様？だつてこんなに小さいんだもん！兄様さえよければお姉さんと呼んでもいいよ？」

いや、それは学校でやったしなあ。

渋る僕を見かねてか蕾は何か言い出した。

「……くすん、私には甘えられないの？兄様。シャルさんには甘えてるくせに〜。」

多分チクったのは剣治だ。しかしこれで退路は絶たれた。覚悟を決めよう！

「……今日一日だけだよ蕾。……わかったよ、蕾お姉ちゃん。淋しがりやな僕をおもいきり抱きしめてください！」

明日、目が覚めたら大きくなったらいいなあ。牛乳沢山飲んだら

大きくなるかもしれないなあ。

そして蕾は僕を（非力）おもいつきり抱きしめた。
ぐはあ！

「やっぱり兄様は優しいから大好きっ！」

ばきばきばきばき！

「あはは。がはあ！くっ、蕾、もうちょい抱きしめる力を……。」

「緩めてくれないかな？」

「わかったよ兄様、もつと強くだね？」

……！！？

「ちがつ！あがつ！ぐはああ！……あべしっ！」
僕を助けてくれる人は至急、ご連絡下さい。

どうやら気を失てたみたいだ。蕾は僕を抱きしめて寝ている。身体はしっかりホールド多分身体には生々しい傷がくつきり残っているだろうなあ。

「うーん、兄様あ？私がハグハグしてあげるよあ？」

・・・トラウマ、それは心的外傷。

3

2

1

ムギユウ！ぐっはあ！

・・・次に起きる時は身体が大きくなったらいいなあ。

そのよん 小さくなったらやはり恐怖！（後書き）

蕾恐いですね。さて、まず謝りますごめんなさい今回短すぎだったと思います。本日は蕾の話になりました。どうだったでしょうか？たのしかったらよかったです。まあ、これからも応援よろしくお願いしたいと思います。

その「何と無く新しい読み方。」

朝、気分は最低。そして身体はボロボロだが、心はドクンドクン。
何故なら……。

「……なんか蕾かなり格好がすごいよ。」

蕾はかなり体制が危うい。もう少し動いたら下着が見えそうである。朝からドキドキしっぱなしである。

「蕾、早く起きて起きないと僕が鼻血出してまた寝ちゃうよ!」

「う、うーん。わかったよ兄様。起きればいいんでしょ?」

眠たいと顔が訴えているがこれでいいのだ!

「兄様、おはよう!……まだ小さいままだね?」

はあ、まだまだ小さいまんまこれからどうなるんだろう。

「まあ、誰かに頼んで大きくしてもらおうよ。多分剣治が僕を戻してくれると思う。」

結局、人任せだが、仕方ない事である。

それからいつものように朝食を食べて学校に向かうはずだったが・
……。

「時雨様、そんな格好では高校に入れませんか?」
つまり身体が小さいので常識のある人は誰も僕とは分かってくれな
いだろう。

「今日は風邪でおやすみと言ってますので家に居てください。」

蕾はすでに行っており、執事さんは用事で出掛けてしまった。ちなみに母さんは未だに帰って来てない。

「でも美奈さん。」

「言う事聞かない悪い子にはお仕置きですよ?」

目がマジだ。

「わかったよ。僕は一日家にいます!」

しかし、家に居てもひまなので美奈さんの手伝いをする事にして自分の部屋を片付ける事にした。

「・・・よかったあ。まだこの本はばれてないようだ!あ、こっちも大丈夫だ!」

自分で掃除をするとあの宝が美奈さんや他の人にばれてないかついつい気になってしまう。そしてついつい読み始めてしまう。

「・・・・・・・・オーススゲー!」

はっ!殺気!?

「・・・小さいのにやっぱりスケベですね?学校サボってまでそのような本を見てるなんて・・・」

僕の後ろには美奈さんが立っている。僕に残された道は二つ。一つはごまかす。そして二つ目は白状する。

「ごめんなさい!今すぐこんなにかわしい本は捨てます!」

それから僕は美奈さんに持っていた本を取られた。しかし、残された本はなんとかごまかして守る事ができた。

「これは私が責任持って処理します！」

「はい、すみません。二度とばれないように隠します。」

「……なんかおかしい部分があったけど今回はこれで許しますよ。」

やった！僕はやったよ父さん！

「……反省してないみたいだからおつかいしてもらいます！」

おーまいごと！

そして僕はメモをもらい右腕に買い物カゴを装備して街という名のダンジョンに出かけたのであった。

「……あ、今回はメイド物を読んでたみたいですね。うふふ、今回は見逃してあげますよ、時雨様！」

大体のお使いを終え、最後の店に入る。すると後ろから誰かに声をかけられた。

「おや？時雨じゃないかな？」

振り返るとミニスカートから伸びた足が見えたから見上げてみるとパンツが見えたので慌てて顔が見える所まで後退り再度見上げる。

「シャル姉さん！おつかい？」

昔は裁判長であり、今は僕を監視している立場である。

「そうだよ、しかし見ない間に縮んだね？誰かに頭叩かれたとか？」

僕は事情を簡単に説明した。

「大変だね？まあ頑張ってたね。私が手伝ってあげれる事があつたらなんでもするからね？」

そういつて店の中から出てくる一人の客に話し掛ける。どうやらシャル姉さんは万引きGメンという仕事をしているみたいだ。

邪魔をしてはいけないのでさっさとお使いを済ませ家に帰ることにした。帰り道では誰にも会わず、ユーフォーを見たぐらいだった。

「平和だなあ。」

ほーほけいきよう！

・・・季節はずれの鳥までないている。

自宅に戻るとすでに昼食の準備が終わっており、僕は美奈さんと一緒に話をしながら御飯を食べることにした。

「・・・時雨様、昨日のお風呂は気持ちよかったですか？そしてよく眠れましたか？（皮肉）」

「うーん、やばかった！かなりやばかったかな？色んな意味で・・・（皮肉には全くこれっぽっちも気がついてない。）」

美奈さんははあ、と溜息をつき、僕をまじまじと眺め決心したように言った。

「・・・今日、夜は必ず私の部屋にきてくださいね？」

前にもこんな事があつたような・・・。

「・・・うん、頑張っていくよ。今度はどんな薬かな？期待してるよ。（かなりの皮肉）」

「ふふつ、任せてください。時雨様の期待に答えられるよう努力します！（皮肉ととらえているがある意味違うので笑う）」

ま、期待していよう。・・・いや、覚悟しておこう。

昼から今度は母さんの部屋の掃除。今は使われていないが、たまには掃除しないといけないらしい。

棚を整理していると巻物？みたいなものが落ちてきた。

「・・・えーつと、これは家系図みたいだな。母さんの名前が載ってるし、蕾の名前も載っ・・・！」

い、許婚！？

「どういう事だ？蕾は妹だろ？」

しかも誰の許婚だ？・・・僕の許婚か？

しかし、バツテンが蕾の名前にはつけられており、どうやら違ってたみたいだ。

勘違いか、まあ、しょうがないな。さて、次を片付けようかな？

棚のうえからはまだまだ色んな巻物が落ちてきた。特に気を引い

たのは次の巻物である。

『天道時家の本職』

一体全体なんて書かれているんだろう？

ぺらっ！

『天界と魔界の霸王』

こらまたスゲー職業だな。勇者に倒される側だな。うん、ラスボスか……。

しかし、そういう意味ではないようだ。

『全ての人間以外の生命体をまとめし者。』

つまり、みんなをまとめる職業だな。うん。

僕は巻物を綺麗にまとめ、元の位置に全て戻した。見ようと思えばいつでも見ることが出来るからである。

「時雨様〜！おやつですよ〜。」

「はい！」

僕には巻物より大切なものは沢山ある！まず、おやつ！
冗談です。

「今日は時雨様の大好きなホットケーキですよ？」

「わーい！」

そこ、まるでガキだなんて思わないで下さい。僕はホットケーキが大好きなんですよ。

さつさと食べ終わり、そろそろ学校が終わる時間になる。部活をしてない人達は帰宅の準備をしていることだろう。

「やあ、みんなの代表でお見舞いにきたよ時雨君。ちなみに見舞い品はこの本だ。」

僕の部屋にある窓からなんなく入って来た！ルパン 世もびつくりだ。剣治に渡された本は様々な事が書かれていた。

「ありがとう剣治。僕はまだこのままかな？」

剣治は床に落ちていた手紙を僕に渡して言った。

「大丈夫、明日の朝には戻っているからね？そしたら魔王さんから手紙を必ずだよ？わかったね。」

用事は無くなったとばかりに今度は煙を出しながら消える。まるで忍者である。

「窓から帰っちゃった……………は！」

床に一枚の紙が刺さっていた。

『時雨君、君の宝はこの剣治が確かに頂戴しました！』

おのれ剣治め……………。

僕はどうにかしたかったが、どうすることもできないだろうなあ。

そして晩御飯。今日は執事さんもいるのでみんなで食卓を囲む。執事さんは急に僕の顔を眺め始めた。

「・・・うーん、時雨様には何か良くない事が起きそうですね。気をつけてください。」

すでに起きてますし、今日の夜起きそうです。

食後、蕾は眠たそうにしながら部屋を出ていった。

「疲れがたまってるんでしょう。昨日の夜は色んな事があったでしょうし・・・。」

蕾はそのまま眠ってしまったようだ。ぐっすり寝ているから朝まで何があってもおきないだろう。

今日はゆっくりお風呂に入ろう、蕾が寝ている間に・・・。

そして、約束通り僕は美奈さんの部屋に行った。

「お待ちしてました。こちらに寝てください。」

そこに置いていたベットには不思議な装置がくっついている。まるで手術する機械みたいだ。

「・・・あの、これで何かするんですか？もしかして・・・」

美奈さんはニツコリ笑い。

「大丈夫ですよ！ささ、早く寝てください。蕾さんに邪魔をされないようにわざわざ危険をおかして眠り薬をいれたんですから・・・。」

は、犯人は美奈さんだったのか・・・。

「終わったら何でもしてあげますよ。」

「てか、これは何する奴ですか？」

「貴方を元に戻す機械ですよ。嫌なら別にいいです。」

今すぐ戻るなら・・・。

「・・・わかりました。」

僕はベットに横になり、目をつぶった。

「さて、始めましょうか？・・・改造手術を・・・。」

改造手術！

ウィーン！ガタン。

ぎいややややあ！

そして僕はなんとか身体が元に戻ったが、久々なので足元がふらつく。

「・・・やっと元に戻りましたね？うふふ、最後に薬をあげましょう時雨様！」

薬？自白剤かな、眠り薬かな？

「元に戻った記念ですよ。」

美奈さんの顔が近付いてきて……僕の顔にふれた。

少し僕は固まった。美奈さんはそくさとはなれた。

「私からの薬です、これで普段通りになりましたか？」

足がガクガク震え、床に尻餅ついてしまった。

「……すいません、薬が強すぎました？では次にあの手紙を読んでくださいね？剣治さんが言っていたとおもいますから……」

僕は美奈さんにおんぶされ自分の部屋に帰還。そこには蕾がイビキをかきながらぐっすり寝ている。眠り薬は絶大な効果をうんだようだ！

ベットに腰掛け、美奈さんから手紙を取ってもらい黙読。

「久しぶりだね、悪いが簡潔に説明しよう。時雨君にまた頼みたい事があるんだ、実は人間界に厄介な魔族がはいつてしまったからそれを破壊してほしい。……」

そこに書いている魔族の名前は初めて聞くものであった。

『天使を狩者 ジェノサイド・エンジェル
殺人機』

ぶっちゃけ、これはやばいんじゃない？特に名前が……殺人機とかいてもこう読む奴はまずいないだろうに……。

明日も大変な一日になりそうである！

そのこ 何と無く新しい読み方。（後書き）

皆さんこんにちは。いやゝ今年の夏は苦しかったです！特に夏休みの宿だ・い。さて、そんなことより今回はやつと魔王からの手紙をだす事が出来ました。次は暴れまくる奴らを出したいと思います！そして最後にいつも見てくれる方、ありがとうございます！

そのろく 旅立ちは漢と共に・・・。(前書き)

えーっとやっと話しかわりを迎え始めました。

そのろく 旅立ちは漢と共に……。

手紙を見てから少し経ったある晴れた日の事である。その日は剣治と久しぶりに帰っていると公園に不思議な人がいた。

「……時雨君、殺人機だ！」

あれからずっと捜してようやく見つけた殺人機はとっても可愛いものであった。

放課後になつてすぐ、剣治が殺人機とはなにかと教えてくれた。

「人形の一種さ、昔天使をハリセンやバットなどで倒していた恐ろしい奴だ。今はほとんど壊されているのでその存在は疑問視されたりしているんだよ。」

たかだかハリセンなどで天使を倒すなんて……………。

「大体、殺人機は女性型が多いらしい。なぜかは創る人達がほとんど男性だからだ！殺人機を見れば製作者の好みがわかるのだよ！」
うわースゲー。

「昔の資料を参考にして僕が創った殺人機を魔界にあげたんだよ。」

なるほど、剣治のタイプはそれを見ればわかるのか……男型だったらどうしよう。

そんなことになつたら僕は剣治を……たおしてみせる！

「・・・何考えてるか顔にかいてあるぞ。失礼だな時雨君、僕が創ったのはれっきとした女の子だ！昔時雨君が倒した龍と色々まぜたものだ。」

知らなかった。そういえば、初めての魔界はいい意味と悪い意味で色々あったなあ。

「じゃあこれから殺人機を捜そうか？」

そして今にあたる。

「彼女が『なんでやねん！』と言ったらハリセンが振り落とされる合図だ。」

『なんでやねん！』

どがしや。

「うわっ！あれハリセンじゃないよ！！ちなみにあの人関西の人？」

「いや、違うよ。あの機能はただたんに面白いからつけただけ。あ、名前はまだつけてないからね。」

僕の後ろからそんな声が聞こえる。

『秘奥義 墓気斗津呼身！！（ヒオーギ ボケとツツコミ）』

「ま、待った！話し合いをしよう！」

僕はこっちにやってこようとした殺人機さんに話し掛ける。

「貴方が何故そのような判断をしたか教えて欲しい。私が納得出来なかったら攻撃を再開する。」

理由は簡潔だ。

「貴女は周りを見て気が付かないんですか？」

殺人機さんは辺りを見て気が付いた。

「まーくん、あれって痴話ゲンカかな？」

「いや、多分どっちがツツコミがすごいかでケンカしているんだよ。」

僕たちは小さな子どもに囲まれた。剣治はすでにどこかに消えていた。

「貴女は、こんな小さな子ども達を巻き込めるんですか？」

辺りが歓声をあげる。

「にーちゃんいい事いうねえ？」

「惚れそうだぜ！」

「……本当に子どもかな？」

「……わかった、では何処で話し合いを行う？」

野次馬のませた子ども達はそういった瞬間、全員が公園からでて

いった。そして最後に出ていく少年がこういった。

「・・・今回は僕たちの心の休まる空間を貴方達に提供してあげますよ。」

何と無くキザだ。

それから僕たちはブランコにすわり話始めた。

「僕の名前は時雨。君は・・・。」

そんな時誰かからメールが来た。なんてお邪魔虫な人だろう。

そのメールは剣治からのものであった。

『名前を付けて下さい。』

・・・モンスターを仲間にした時に出てくるやつみたいだな。

「・・・実は君を創った人から連絡がきて名前を決めていいと言われたんだ。君の名前を付けていいかな？」

「どうぞ自由に。」

さて、名前はどのような？

すでに当初の予定が変わった気がするが・・・。

「じゃあ、君は今日からハセだ！」

また、携帯になる。剣治からのメールである。

『彼女が多分説明書を持っているので見せてもらおう事。』

説明書をもらい、眺める。

『名前を付けた人が責任もって世話して下さい。』

再度剣治からのメールが届く。

『浮気は駄目だよ時雨君。』

・・・・・・・・！！？

頭で処理するのに少しかかってしまった。

「よろしくマスター。」

・・・・悪いが魔界に送ろう。

「えっとね、魔王さんのところで働いてきてくれないかな？」

「ラジャーマスター。」

瞬きした間に消えてしまった・・・・。

またもや剣治から連絡が・・・・。

『もしもし時雨君？一応は指令は成功だね。魔王さんからお礼の品

が届いているよ。ちなみに賞品は家に行ってるからね?』

あけたらメイドさんは嫌だなあ。

そんなことを考えながら帰路についた僕はまだしるよしもなかった事件が起こっていたらしい。これは後に書きたいとして、家に帰った後も大変であった。

魔王さんからのお礼は至って普通。洗剤の詰め合わせとカピスの詰め合わせであった。まるでお中元だと思ったが蕾と美奈さんはご機嫌だった。

「ちょうど洗剤無くなってたんですよ!よかったあ。」

「わーい!カピスだ!久しぶりに飲みたかったんだ!」

夕食を食べ終わって少し暗くなった外に一人で散歩しにいく。近くの外灯が点灯し、人影が僕の前に現れた。

「・・・時雨君、ちょっと話し相手になってくれないかな?」

むろん、剣治である。しかし暗い顔をしているのは辺りが暗いだけではないようだ。僕は頷き近くの壁に寄り掛かる。

「・・・時雨君、そこはペンキ塗り立てだよ。」

「・・・何色?黒なら大歓迎だよ。今黒の制服きているから。」

「・・・ピンクだ。」

そしていつもより暗い剣治は唐突に話始めた。

「・・・実は理事長からの命令で他の学校に行く事になったんだ。」

そして悪いが君まで巻き込まれたらしい。明日、僕たちは違う高校に行かなければならないんだよ。だが、一年ぐらいで戻れるらしいからついて来てくれるかな？」

僕に迷う権利はない。

「いいとも！一年ぐらい大丈夫だよ！」

溜息を出す剣治。

「ちなみに行く場所は男子校だよ。女子高生なんかいないんだが？」

はつきり言おう。今のでかなり決心がゆらいだ。今にも壊れる建物ぐらい揺らいだ。

「大丈夫。一年ぐらいの辛抱だからね。」

「・・・そうか、じゃあ明日は家にいてくれないか？僕が迎えにくから。」

そういつて帰っていく剣治の背中にはピンクに染まっていた。

その後、家に帰り美奈さんと蕾、執事さんにその事を報告。泣き出す二人を執事さんがなだめて決着はついた。（二人の口の中にクスリをほうり込んだ後すぐに眠ってしまった。）

「時雨様、しばしの別れですね。」

「ははっ、そうですね。まさかまた転校するなんて思っていないませんでした。」

それから二人をベットに寝かせ僕も眠りについた。

そして朝。起きたら車の中であつた。運転しているのは剣治の家にいるメイドさんで間違いはないだろう。

「やっと起きたかい？もうすぐつくよ。」

剣治が身体をおこした僕に告げる。外を眺めると高校が確かにたつていたが前にくらべるとかなり小さい。

「そしてあれが僕たち二人が住む家だ。」

指された方向を見ると神社の近くに小さな一軒家が建っていた。

「え、寮とかじゃないの？」

「むさ苦しい彼らと一緒に生活するなんて僕の彼女達が黙っちゃいないよ？」

連れて来たのか・・・。

一番大きい部屋が剣治ではなく彼の彼女達つまりフィギュアとなり、僕たちはそれぞれ次に大きな部屋に入る。

「いやー大変だったよ。この家見つけるの。さて、学校にいかうか？」

僕と剣治は同じクラスになり、至って平穏な転校だった。何故なら……。

「……このクラス僕たち二人以外に誰もいないよ？」

「大丈夫、他のクラスも対して変わらないから。」

昼休み剣治と共にかなり静かな教室で弁当を食べる。時折背中が寒くなるのはきのせいかな？

「お、君たちが新しくやってきた転校生か」

男子生徒が一人入ってきた。

別に名前を覚える義理はないので男子Aとしておこう。

「この学校は来年で消えるからね。今更ここに来てても意味がないよ。」

きたくて来たわけではないことを話しておきたい。うおー！女子高生マジでいないね。先生もがっちりした人達だけだしなあ。

……何考えているんだ？

剣治が僕を眺め鼻で笑った。

「僕には彼女がいるから必要ないね。」

いつから読心術を覚えたんだろう。それとも僕の勘違いだろうか？

その日は学校が終わるとさっさと帰る事にした。

これからはむさい男子生徒とずーっと一緒なのか・・・？（ヒヨロリとした男子生徒は存在しておらずかなりがたいのよろしい方が多い。）

不安だ。

そのろく 旅立ちは漢と共に・・・。（後書き）

読んでくれる方々ありがとうございます。さて、今回からは一段落つけて二人には場所を変えて頑張ってもらいたいと思います。時雨君は不満げだから昔と違っているのが目に見えるぐらいわかります。そんな時雨君は次回事件をおこしてもらいたいと思います。最後に、普段評価してくれる人（名前は伏せますね。）ありがとうございます！

そのなな 目指せ！共学への道。

あれから数日経った。

いまだにあつくるしいムキムキの男達に囲まれた学校生活だが、一つ気が付いた事がある。剣治と共に住んでいる家の近くに神社があり、そこには人が全くよりつかないらしい。今は寂れてボロボロの神社であつた。そして学校から帰ってきた僕は何と無くその神社に行き、これからの生活で何かあつてほしいと頼みにいったときのことである。

「さて、十円でいいかな？」

財布から取り出そうとしたが悲劇がおきた。

硬貨の中で一番高価なお金が落ち、賽銭箱の中に入ってしまった。

「……………」

どうにかして取り戻そうとしたが無理であり、更にそんな光景を同じ高校の制服をきた人物に見られてしまった。しかし、その顔は初めて見るものであり、体格はほっそり。更に顔は今まで見ていた男達のようにではなく白く美しいものであつた。

「何やってるんです？」

声も高い。

「いや、実は間違えて五百円玉を入れてしまひまして……………」

相手も僕に同情するような仕草を見せ、財布を取り出して五百円玉をだした。

一瞬、僕にくれるのかと思ったがその五百円玉は賽銭箱に進入。

「・・・これで貴方と一緒にですよ。気を落とさないで下さい。」

呆氣にとられている僕を眺め、更にこう告げた。

「実は僕、不登校なんですよ。少々いじめられてね。だけど君転校生だよな？出来れば僕の友達になってくれないかな？」

差し出された手をしげしげと眺め気が付いた。この人は人間じゃないようだ。

「・・・はあ。別にいいですよ。」

握手すると謎の少年は立ち去ってしまった。僕も帰ろうと思い何と無く下を向くと五百円玉が落ちていた。

「・・・・・・・・・・。」

偶然だろう。

自分の部屋に入るとびっくり！置いた覚えのない美少女フィギュアが数体並んでいた。今まで置いていたガムのプラモは隅に隠れるようにしてたっている。

侵略。間違いなく剣治が僕の部屋に入り、陣地を確保していつて
いるのだろう。

「・・・明日プラモを買ってきて棚に飾っておこう。」

そうすれば剣治は手出しできまい。・・・多分。

そして次の朝。

剣治はすでに学校にいつており、僕も急いで朝食をとり学校に登校。げたばこをあけると手紙が入っていた。（ここは男子生徒しかいないはずなのでラブレターの可能性は低いはずである。もしかしたら・・・という可能性もあるが、多分番長かなんかが僕の事が気に入らないんだろう。）やはり中身は体育館裏にくるようにとかかれていた。

放課後、一人で体育館裏に行つてみると先客がすでにいた。

「・・・やい、このおかま野郎、またノコノコ学校にきやがったな？」

今は隠れて虐める奴らが多いと思っていたが、古風な人もいるもんだ。しかも舎弟の一人に押さえられている相手は昨日の人である。

「・・・僕はおかまじゃありません。」

一応抵抗はしているみたいだが、あまりに無力に見えたので助ける事にした。・・・この事件がキツカケで僕はまたあらたな厄介な出来事に巻き込まれるのである。

始まり、それは唐突に・・・。

僕はまず、話し合いで解決しようと努力してみた。

「あのー、すいません。林檎一個とその人を交換しませんか？」

「ああ？時代は光なのに何言ってるんだ？物々交換の時代は終わったんだよ！この前日本史で習っただろう？」

意外に勉強熱心な不良である。暑苦しいので今回は悪いが眠ってもらおうかな？

『我は、・・・・』

ドカツ！ボキツ！？べしやあ！

取り巻きも含め、彼を囲んでいた全員を夢の世界に連れていった。唖然としながら僕を見ていた彼はなんと僕に抱き着いてきた！（言っておくが、僕にそっちの趣味は全くない。）

「ありがとう！僕を救ってくれて！騎士様どうぞ貴方の彼女にしてください！」

「いえ、遠慮します。大体貴方は男ですよ、ちゃんとぶら下がってるでしょう！」

男に抱き着いてこられるのは面倒なので股間を蹴ろうとして気が付き、慌てた。

この人、男の勲章がないのだ！

「・・・貴方、もしかして女の子とか？」

「ばれました？実は女の子なんですよ！小さい頃から男みたいに育てられてきたんですがね」

「・・・そうですか、それは大変でしたね？」

悪いが今日は疲れていたので帰らせてもらっ事にした。だが・・・。

「そんな！つれないですよ！今日は私が面白い所に連れていってあげますよ。」

胸を押し付けてきたので悪いが僕は鼻血を出し、昏倒した。（ずっと男といるからだろうか？）

次に目が覚めたのは保健室でも自宅のベットではなく何処かの家の布団の上であつた。多分、先程の女の子の家ではないかと思う。部屋を見渡してみるとかなり凄い。辺り一面柔道や剣道、相撲に關係するものがおいてある。なかにはだれだれが使っていたふんどうしなんてものもあるくらいだ。

「あ、大丈夫だった？」

部屋の扉が開き、女の子が入ってきた。そして後ろからもう一人入ってくる。

「はじめまして、私はこの子の姉です。」

うーん、美しい。まるで絶世の美女だ。

・・・なんて齒の浮く台詞なんだろう。僕は黙って話を聞いた。

「あの学校はね、来年共学になるのよ。」

そう、これからこの共学についての争いが幕をあけるのである。彼女達は共学に賛成なのだが、残りの男子は反対らしい。（僕も

賛成。何故かは不明なのでじきにわかるだろう。今日は一旦、家に帰ることにした。帰り際に二人に自己紹介された。

「助けてもらった私が平塚満で私の姉さんが……」

「可奈子です！以後よろしくね？」

うーん、うれしいなあ。可奈子さんのほうはあの男子高校ではないらしいが、関係はしているらしい。

家に帰り、先に帰宅していた剣治に共学の話をするとその事は知っていたとばかりに話始めた。

「……実は今回の転校は共学を実現させる為に行われたんだ。つまり、僕たちが共学にした時点で帰る事が出来るんだよ。後、一年たてば共学になるけど一年以内に何とかして共学にすれば僕たちは帰る事ができるのだよ。」

知らなかった。

そしてどうやったら共学に拍車をかける事が出来るかというところ。反乱分子を全てなくせばいいんだよ。」

恐ろしい事である。しかしまあ、力で振伏せる事はないだろう。

「さ、時雨君今日はもう寝ようか？明日から大変だぞ？」

次の日、あの事を忘れていた僕はちょっとマヌケかもしれない。

そのなな 目指せ！共学への道。（後書き）

さて、今回ようやく？新人が出てきました。まあ、物語にも進展はありましたがね。いかがでしょうか？最後にこれからは慌ただしくなる予定ですが、一つよろしく頼みます。

そのはち 貴族眼帯と竹刀（前編）

あれから数日経ち、校内での反対活動が始まった。

それは異様な光景である。

毎朝、希望者達が集まり廊下をフンドシーつで練り歩きながら『共学反対』と叫んでいるのである。

そしてもうひとつ変わった事がある。僕が廊下に出たりすると男子生徒は全て逃げ出すのだ。剣治が言うには僕が気絶させた相手はこの番長であり、全校生徒で喧嘩をうったが負けたらしい。つまり、それを倒してしまった実質この男子校の番長になってしまったのだ。まあ、実は男子生徒にひかれる理由はこれだけではない。見た目は美男子だが、中身は女の子の満さんが僕に学校中ベツタリくつついてくるのだ。それにより、僕には男好きとのレッテルが張られ剣治以外に男子生徒は話し掛けてくれなくなった。

はつきり行つて早くこの高校から脱出したい。そして今僕は共学の道を開くためいろいろと頑張っているのである。そんなある日それは朝から始まりを告げる事件である。

「時雨君、今日は剣道部から当たってみようか？」

……ついに始まるのか、剣治による生徒会長への栄光の口ドが……。

昨日賢治から聞いた共学促進の方法。

まず、剣治が生徒会長となり全校生徒を掌握。共学を唱える。そして無理やりでも良いので全ての生徒の署名を集めて教師に渡す。これが今の所の作戦である。

そしてその作戦を実行させるためには今の生徒会メンバーを倒していき、全てのメンバーを仕留めれば生徒会長に挑戦できるのだ。(この学校では凄いことに生徒会長を倒せば生徒会長になれるらしい。)だが、生徒会長は人間ではないという事を健治に聞いた。そしてその生徒会長は今是不在らしく、なんでも誰かに負けたので修行に出ているらしい。つまり今メンバーを全て倒せば会長不在で強制的に会長になれるのである。

「剣道部の首はすぐそこだ。」

剣治が意気揚揚と答えているが何か考えはあるのだろうか？相手は剣道部の首領である。鞆を持って剣治と一緒に家を出ると満さんが立っていた。

「さ、学校に行きましょう。時雨君。」

・・・なぜ誰も女の子ときがつかないんだろう。声も女の子だし、風体も女の子の体つきである。

「やれやれ、朝からおあついねえ。お邪魔虫の僕は先に学校に行ってるよ。」

剣治はダッシュで走り去り、それを慌てて追いかけようとした僕は腕を満さんにつかまれて阻止されたのであった。

「時雨君、逃げちゃ駄目だよ。」

・・・人生逃げなきゃいけないときだってあるんですよ。

「あ、空にスカイフィッシュが大群で飛んでいますよ。」

「え、あ、ちょっと待ってよ時雨君！」

脱出成功！

「甘い！甘いよ時雨君。この私から逃げるなど不可能。」

振り返ると既に満さんの姿はなく気が付くと僕の隣を走っていた。走っているというより浮いているのだ。

「足なんて飾りだよ。」

えらい人にはそれがわからないんですよ。」

うわ、仮面をつけた赤色大好きな人が言いそうなせりふだなあ。

だが、僕だつてつかまる気はあまり無い。

『我は、天界魔界を統べる罪深き天使という名の悪魔。』

あたりの時間を止めてついでに逃げさせてもらおうか？

だが、世の中上手くいかないのである。満さんはさっさと僕にしがみつきプロレス技みたいな事してきた。よってこの状態で次官を止めると僕も動けなくなってしまうので、今日は諦めることにしたのである。

やれやれ。

そしてその頃学校では緊急の話し会が行われていたのである。

「このたび緊急に集まってもらったのはボランティアの空き缶集めのためではない。」

「では、何のために我々生徒会メンバーが集められたのだ。」

「転校生霜崎剣治と天堂時時雨が生徒会乗っ取りを目論んでいるらしい。今、生徒会長は修行のたびに出ているのでメンバーがすべて倒されたらやばいんだ。」

「まず、剣道部の不思議眼帯が止めてくれるだろう。剣の腕は生徒会長の次にうまいんだからな。しかし世の中は凄いものだなあの生徒会長をしのぐ剣士がいたなんてな。」

「そうだな。うわさでは生徒会長はハリセンにまけたらしいからな。」

そんな話し合いがあっていたのであった。

そして所変わって剣道場。既に先に言っていた剣治に追いつき、ただいま僕は、剣道上のハジに座っているのである。

「ねえ、剣治剣道部の首領はどんな人なの？」

これに答えたのは剣治ではなく僕に引っ付いてる満さんである。

「変な眼たいさんだよ。みてみればわかるよ。」

いきなり太鼓が鳴り響きレッドカーペットが入り口から転がってきて、目をつぶっている剣治の前で動きを止める。そして入り口から入ってきた人はギャップの激しい眼帯坊ちゃまであった。

まず顔は右目をしろーい包帯でぐるぐる巻きにしているその包帯を頭に巻いて背中にたらしめている。鉢巻みたいになっているのだ。更

に包帯のうえから黒い眼帯をつけていて、きている服はこてこてしている服である。昔の貴族のような格好である。

「君が、異分子かい？」

きざみに話し掛ける包帯さん。だが剣治は黙っているの仕方なく僕が答えることにした。

「はい、そうです。あ、すみません自己紹介がまだでした。彼の名前は……」

貴族眼帯さんは手で僕を制しどこから取り出したのか赤いバラを手を持ちキザったらしいのである。

「ふ、わかつているさ。剣治君だろう？」

その先を言おうとして眼帯貴族さんはしゃべれなくなってしまった。なぜなら……。

剣道場の窓が割れて、竹刀が目の前を掠めていき貴族眼帯さんのおでこに直撃。その場に倒れてしまった。

剣治は目を開き敵が外にいるらしいことを悟ると外に出て行ってしまった。僕は慌てて眼帯貴族さんを起こしに行く。

「眼帯貴族さん大丈夫ですか？」

何とか目を開ける眼帯貴族さんは虫の息である。

「少年、私の名前は眼帯貴族ではない……」

だが、この言葉も長くは続かなかった。

二本目の竹刀が眼帯貴族さんにあっさりヒット。今度こそ彼は気絶してしまった。悪いことは続くようで、倒れた彼に窓を突き破り新たな人物が眼帯貴族さんのうえに飛び乗ったのである。

「ぐええ。」

悲痛な叫び声を上げ動かなくなる眼帯貴族さん。

「ふふつ、弱いわよ兄さん。」

そんな彼を見下した目で眺めているのは多分彼の妹であろう。

「・・・・・・・・」

啞然としている僕に気がつき手に持っている竹刀を向ける。

「あなたが道場破りの愚かなお方かしら？」

ショートカットの女の子は僕を見下ろしている。だが、僕は答えることが出来なかった。

「時雨君、鼻の下が伸びてるよ。」

恥ずかしい限りである。僕の視線は彼女のはいているスカートに目がいっていたのである。視線に気がつき慌てて隠す謎の竹刀娘。そこで剣治が戻って来た。

「時雨君。君は災難な男だな、一度厄払いしてもらったらどうだろ

うか。」

剣治からまた竹刀娘に視線を移すと彼女はどす黒いオーラとやらを出していたのである。

「・・・この変態め、覚悟してもらうぞ。」

竹刀を振りかざし僕に迫る竹刀娘。

「・・・ごめんなさい。つい、出来心でみてしまったんです。ホントすいません。」

一応、謝ったが無意味のようだ。

「・・・この世で遣り残したことは無いか？」

ありすぎて話にならない。

「やれやれ、そら受け取りたまえ時雨君。」

竹刀を渡されたので間違いなく戦えといっているのである。

「無に帰りなさい。このスケベやロー！」

竹刀が振り落とされたのでよける。昔の僕ではよけれないだろうが今の僕にはできるのである。

剣道場の床が抜けた。勿論、竹刀の一撃によるものである。

「・・・その一撃はすいかわりに使ってください。」

「却下だ。」

逃げきめが繰り出される前に勝負に出る。持っていた竹刀をしない娘の頭に叩き込む。ここでバトルものだったらかつこよく決まるものであったが、僕の竹刀には仕掛けがあったらしい。

竹刀の先が既に竹刀ではなくハリセンになっていたのである。どんな手品であろうか？

かくしてあっさりと勝負に終止符が打たれたのであった。

放心している竹刀娘の目の前にハリセンを振ってみる。

だが反応なし。眼帯貴族さんもいまだにレッドカーペットの上に倒れたままだである。

「さて、時雨君、満さん教室に帰ろうか？」

結局、現状そのままにして教室に戻ることにしたのである。

廊下では誰にも会わずに教室にたどり着いた。そして、廊下ではふんどしをついた男達が歩き始めたのである。剣治はしばし黙っていたが黙って立ち上がり教室を出て行った。

しばらくお待ちください。

……少々何かを殴る音が響いたあとに剣治が戻ってくる。ホッペに赤い何かがついていた。

「……剣治、口に何かついているよ。」

「ああ、僕としたことがいけないな。ケチャップがついてしまって

いたようだ。」

平然としている剣治だが、廊下のほうからはうめき声が聞こえるのは僕の幻聴だろうか？ 共学の道を早く実現させなければこの学校から生徒はだんだん消えていくのかもしれないな。

そのはち 貴族眼帯と竹刀（前編）（後書き）

いやいや、近頃大変なので最新遅れました。楽しみにしてくれていた人々に申し訳ありません。さて、今回からついに生徒会と時雨軍の戦いが始まりました。まあ、ようやくエンジンが動き出したみたいなもんですが、これからも宜しくお願いしたいと思います。意見がありましたらどしどし文句つけてくださいね。

そのきゆう 貴族眼帯と竹刀（後編）

昼休み。がやがやと騒ぐ廊下であるが僕と剣治、満さんは教室で昼食を食べている最中であつた。

「・・・時雨君、今日の弁当を作つたのは君だつたよね。」

「うん、そつだよ。」

「このリンゴ弁当はどうやって作つたのかな？あまりにも手抜きをしてないかな。」

「・・・ごめん。」

剣治の弁当の中身はリンゴの山盛りであつた。

「・・・やれやれしょうがないな。」

二人でそんなことを話していると満さんが話にかたつてきた。

「二人ともおかしいと思わないの？今日の朝倒した眼帯貴族の事。」

あれは彼の妹と思われる女の子が倒したものである。

そんなことを話していると校内放送が聞こえてきたのであつた。

『えーと、本日の朝剣道部首領と戦つた人は今すぐ剣道場に来て下さい。繰り返します・・・』

三人で顔を合わせると剣治と満さんが僕を見ている。

「・・・早く行きたまえ、時雨君。」

「うん、早く行ってきたほうがいいよ。」

「・・・僕だけ？」

頷きあう二人。

「大丈夫だ、僕もこの弁当を食べたらすぐに向かう。ちなみに僕はあまりリンゴは好きでは無いな。」

「私もお弁当食べたらすぐに行くから頑張ってね。」

満さんのお弁当箱はかなりでかい。食べ終わるのにかなりの時間を有するであろう。僕はしょうがなく立ち上がり剣道場に続く廊下を一人むなしく歩くのであった。

剣道場にはいるや否や竹刀が跳んできた。

「うわあ。」

危機一髪でよけると新たな竹刀が跳んできた。

・・・いつから僕は竹刀にすかれるようになったのであろうか。結局一本目に跳んで来た竹刀を拾い上げて飛んでくる竹刀を叩き落とす。まあ、実際の所ちよつと当てるぐらいで竹刀は落ちてくれたのだ。

竹刀が飛んでこなくなったので奥に進むと二人の人間が僕を迎えてくれた。

一人目は眼帯貴族さん。そしてもう一人がその妹と思われる人物である。

「ふ、なかなかやるじゃないか。」

眼帯貴族さんは右手で髪をかきあげながらそんなことを口走る。

「兄さんが投げたわけじゃないくせにえらそうにしないでくれる?」

その反応に頭にきたのかその妹が反論する。

「・・・あの、早く用件を言ってくれませんか?」

このままにしておいても時間が無駄に過ぎると思うので僕から話をすすめることにした。

「なに、簡単なことさ。君が戦ってればいいことだからね。」

「どちらと戦えばいいんですか?」

僕の視点から見るとこの人たちはかなりのやる気を見せているようだ。

「もちろん」

そこまではもったが、

「私」

「僕」

見事に分かれた。

「・・・兄さんにはまた眠ってもらおうかしら？」

となりにいる兄に問答無用で竹刀を叩きおろすその妹。

あまりに話がとんとん拍子に進みすぎているのでとてつもなく違和感を感じてきた。

ドグオ。

痛々しい音が剣道場に響き眼帯貴族さんはその場に倒れふしたのであった。

「自己紹介がまだでしたね。」

竹刀を振り回しながらこちらをふりむく竹刀娘。

「・・・いえ、自己紹介をしてくれなくて結構ですよ。」

僕の意見としてはこれだけいえることは間違いない。できればこれ以上おかしな人たちがでてきてもらっても困るのである。つまり、竹刀娘が自己紹介をしてしまうと彼女とは知り合いになってしまい、下手すると毎日竹刀が僕に飛んできそうな感じがするのである。

「遠慮しないで結構よ、私の名前は柳 涼

（やなぎ すず）よ。覚えておきなさい。ちなみに呼び捨てで構わないわ。」

・・・。

「しょうがないか、あきらめよう。そっちで気絶している人の名前は何ていうの？」

涼は僕が指さしている人物に目をやったが
堂でもよさそうな顔をした後に、

「そんなの気にしなくて結構よ。あなたはエキストラの名前がそんなに気になるの？」

少々眼帯貴族さんがかわいそうである。

「うう、ひどいよー涼が虐めるよ。その君、こんな悪い奴成敗してくれ！成敗してくれたらこんな妹君にあげるよー！」

いつのまにか僕の足元に来てそんなことを言っている眼帯貴族さん。

「おだまり！」

飛来してきた竹刀により眼帯貴族さんはまたもや虫の息である。

「・・・もう、そろそろお迎えが来たようだ。へへっ、こんな俺でも天国にいけるのかなあ？」

そのまま目をつぶる眼帯貴族さん。ああ、惜しい人を無くしたものである。

「兄さん、早くそこからどいてください。」

むくりと起き上がり剣道場の隅に座って僕たちの決闘場を作ってくれたのである。更に。

「あの凶暴な妹に勝つたら僕は共学を共に目指すよ。」

これは絶対勝ちたい勝負である。そして最後に小声で言うのであった。

「そして副賞として年頃の男の子には嬉しい本をプレゼントしたいと思います。」

・・・負けられない。必ず僕はこの涼に勝って見せる。

「そうねえ、普通に剣道のルールでやったって面白くないから倒してロープで縛り上げたほうが勝ちにしましょう。」

うなずく僕を見てから眼帯貴族さんが僕に手招きをする。

「・・・いいかい、彼女はそういうのが好きみたいだからね、もしも勝負に負けたら大変なめにあうから気をつけるんだよ。」

そんな忠告までしてくれたのであったが、

「兄さんも同じようにしてあげるわ。」

その言葉を聞いて青ざめて失神してしまった。

僕としては戦っている最中の事をあまり話したくないので結果を

言いたい。結果は僕の楽勝である。しかし、僕はロープで涼を縛るなど到底出来ずに困ってしまった。一応手にロープは持っているのだが、元からそんな趣味を持ってない僕はただただ疲れて寝転がっている涼に説得するばかりであった。

「……お願いだから負けを認めてくれないかな？」

「嫌だ。それならさっさとロープを私の体に巻けばいいでしょ。」

すでに午後の授業は始まっているようで、僕がさっさとしなければどんどん遅くなってしまうのである。

「……なんかいうこと一つだけ聞くからさ。」

「……ふん。」

ここで僕が取るべき行動はなんだろうか。縛ってしまったら剣治から今後変態を見るような目つきで見られるにちがいない。

「……いや、いつそのことばれないようにやってみよう。」

早速僕はそれを実現するためにロープで彼女を縛ったのであった。

「……誤解が無いようにはつきりしておくが縛ったといっても形だけである。彼女が動けばロープはほどけてしまうし、立とうと思えば簡単に立てるようになっているのである。それをきょとんと眺めていた涼だが、僕は失神している眼帯貴族さんを抱えて剣道場後にした。」

ちょうど休み時間になったのであろう。廊下には生徒が出ていて僕を見てさっさと引っこ込んでいった。教室からはひそひそ話が聞こえてくる。

「剣道部の首領結構かつこよかったからとうとう転校生の餌食になったか……。」

「俺達も気をつけないとあの転校生男好きらしいからな・・」

僕は溜息をついて眼帯貴族さんを保健室に連れて行ったのであった。

その後は自分の教室に戻り、剣治たちに状況を報告。剣道部は落としたと告げた。

「まあ、当然といえば当然かな。この調子で頑張っていこうか時雨君。」

「うん、頑張つてね時雨君。生徒会を叩くなら今しかないよ。」

これからもまだまだ共学を果たす夢は大変と推測できるのは簡単なことである。ちなみにこの二人には涼の事は言わなかった。なぜならややこしい状態になるのは編物を知らない人がいきなり始めるのと一緒にだからである。

その後特に何もなく平和に過ごした後、帰宅となった。

こっちに來て少し経つので蓄や美奈さんの事が気になるが元気でやっっているとしんじよう。剣治と一緒に家に帰りつき自分の部屋の中に入ると大きなダンボール箱が置いてあった。過去一度似たようなことがあったので不安になった。剣治に尋ねてみたが彼は知らないといっているので別に危険なものではないと思われる。

あまり気は進まなかったが 開けることにしてみたのだが、さすがにゆうきを必要とした。

「……………えいつ！」

こわごわ目を開けると中からあまり見たくないものが出てきた。

……………涼である。そして眠っているその隣には手紙が置いてあり、それには簡潔に文字が書かれていた。

『約束通り君にプレゼントだ。安心したまえ、ちゃんと本人の許可は取ったからね。』

いやいや、許可とかそんなあれじゃあないだろうに。こんなことをしている場合ではない、急いで送り返さなければ剣治に見つかってしまう。

当然、あの剣治に見つかからないように事は簡単には運ばず、笑いながらずっと僕の後姿を見ていたようである。

「部屋は共同で使ってくれたまえ、別に時雨君が嫌なら他の部屋で寝るならいいんだけどね。」

既に僕の部屋以外には美少女フィギュアがおかれていて、そんなところではあまり寝る気はしない。

とりあえずは涼が起きてから帰ってもらうことにして何気に小さくかかっている部分を読ませてもらおう。

『約束の物は明日の放課後、体育館裏にで手渡したいと思う。』

あれである。僕にとっては二度と手に入らないと思われていた本なので、少し気が緩む。

「・・・時雨君、顔がにやけてて気持ち悪いぞ。」

剣治にできされてしまった。

そして、その頃学校ではこんな事があっていたのである。

「おい、あっさりあの剣道部首領がやられてしまったぞ。どうするんだ。」

「・・・安心しろ、既に次の手は打ってある。それに今まで音信不通だった生徒会長から連絡があった。もう少しで帰ってくるそうだ。」

「ほお、それはいい知らせだな。」

この事は時雨たちは知らなかったし、このあくどそうな人たちも剣道部首領が本当は妹にやられたこと知らなかったのである。そして謎の生徒会長が時雨たちと対決する日はそうかからないかもしれないのである。

そのきゆう 貴族眼帯と竹刀（後編）（後書き）

えーっとまずこの前誤字の指摘をしてくれた方有り難うございます。多分言われるまで気がつくことはなかったと思います。さて、今回は後編でしたがなんとなく前とつなげることが出来ていなかったので自分としては少し悲しいと思っています。そして次は歯切れの良い？十話目になりますね。普段の進行はいつもの二人ですが題名も変わっているのでコンビも変えたいと思います。

そのじゅう はぴばあすでい

「やってきました！記念すべき第十回目。司会は私蕾と・・・」

「時雨様の心の支え、冥土の美奈です。」

「・・・さて、そんなことより私達の出番が全くないのでちつとも面白くないですね。」

「そうですね、時雨様はまた新たな女の子と仲良くなっているみたいです。」

「・・・気を取り直して今回の話は・・・」

「一人目の強敵？を倒した週の休日の話です。」

「ここで宣言！今度こそ絶対兄様のもとに行ってみたい！」

「・・・諦めてください。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

あれから、数日経った。いまやこの家の住人の一人になった柳涼は僕の部屋の半分を占拠している。更に困ったことに僕はベットに寝ていたが今では涼に居座られていて、床に寝ている。そんな日

が数日続き、休日がやってきた。

「……うん。」

僕は目を覚まし体を起こす。そしてベットに居座り安らかに寝ている涼を見て溜息をつく。今は安らかに寝ているが夜になるとすさまじい。なぜなら彼女は僕より早く寝て、盛大ないびきをかいて眠るのだ。この行為によりなかなか眠れない日々が続き、授業中に寝てしまいそんな状況にも陥っているのである。

「ほら、涼朝だよ起きて。」

肩をゆすって呼びかけてみるがあまり反応はないようだ。

「……あと10秒以内に起きないといたずらしちゃうぞ。」

そう耳元で囁いてみるがやはり反応なし。仕方なく実力行使で起こすことにした。

まず枕を取り上げてみる。……起きない。そして次に布団を剥ぎ取ってみるがやはり起きない。そして最後の手段。ホッペを両手で引っ張ってみる。

面白い顔になりながらもおきてくれないのである。そのままほったおくと涼は機嫌が悪くなることは既に学習している。

「……そうだ。」

鼻を押さえてみると効果絶大。苦しそうな顔になり目を覚ましてくれたのである。

「おはよ。」

そう言って手を離してあげるとこっちをジーンとみているのである。その光景が一分ほど続き、涼は目をパッチリ覚ました。

「……………ああ、おはよう時雨。」

顔を洗わせるために立ち上がらせる。近頃はこれが習慣になっ
ているので、この日も涼をしげしげ眺めてみる。髪は方まで伸ばして
いるが普段から少々ぼさぼさである。この前は剣道場の床を破壊し
た実力を持っているが一見するとほっそりしていてどこにそんな力
をもっているか不思議である。

「……………ちよつと時雨朝からなに見てるのよ。」

胸の部分を隠して僕から離れる。しかし実際の所は発育が送れて
いると思うのは僕だけではないと思う。

「ふん、私は他の子より少しだけしか小さくありませんよ　だ。」

そう言っ
て部屋から出て行った。別に涼の胸など見ていないし、
けちをつけるわけでもない。やれやれ、僕はなに言っ
てんだか・

「やあ、おはよう時雨君。昨日はよく眠れたかな？」

「そういう剣治はどうだった？」

そつ
いって剣治と共に溜息を出す。

「……………涼さんは昨日も一段とよく眠っていたみたいだね。」

「うん、朝なかなか起きてくれなかったからぐっすり眠ってたと思うよ。」

今日の朝食当番は涼なので、朝食ができるまで剣治の部屋の前で立ち話をする。剣治の部屋に入ると少々気が引けてしまうので廊下で話しているのである。

「・・・今日は休日だからね、時雨君は暇だろう？」

「あ、うん暇だけどうかしたの。」

「・・・今日は涼さんの誕生日だろうに

この前彼女が『今週の休日は私の誕生日だ。』と言ってたじゃないか、だから時雨君、君は涼さんを連れて何か買ってきてくれないかな。なあーにプレゼントの代金は僕と君の半分ずつで出せばいいんだから。」

その案には賛成であるが、何を買えばいいのであろう。

「・・・大丈夫、彼女に必要で僕たちの夜を守ってくれるものをプレゼントすればいいんだよ。それは安眠枕しかないだろう。」

その意見には大いに賛成である。

「わかったよ。」

そう答えると剣治は薄く笑いかけてその場に倒れた。

「・・・今日は涼さんの誕生日だろうに

この前彼女が『今週の休日は私の誕生日だ。』と言ってたじゃないか、だから時雨君、君は涼さんを連れて何か買ってきてくれないかな。なあーにプレゼントの代金は僕と君の半分ずつで出せばいいん

だから。」

その案には賛成であるが、何を買えばいいのであろう。

「・・・大丈夫、彼女に必要で僕たちの夜を守ってくれるものをプレゼントすればいいんだよ。それは安眠枕しかないだろう。」

その意見には大いに賛成である。

「わかったよ。」

そう答えると剣治は薄く笑いかけてその場に倒れた。

どうやら眠っているようだ。昨日は遅くまで起きていたからとうとう限界が来たにちがいない。僕は剣治を抱えあげ彼の部屋に入り込んだ。その途端異質な空間をかもちだしている物に気がついてさつさと剣治をベッドに放り投げて退散したのであった。

それから朝食を食べに食卓に付いてみると結構いろんな料理が並んでいた。目玉焼き、アジのひらき、味噌汁、その他もろもろ。しかし、それだけでは終わらないのであった。

「・・・張り切って作ってくれたのは嬉しいんだけどさすがにこれはちょっと・・・。」

和食の隣には洋食のラインナップも充実しており、トースト、ヨーグルト、サラダ、その他いっぱい料理がおいであるのであった。

「えー、別にいいじゃない。食べても死にはしないよ。」

そりゃそうだろうが・・・

「それとも今日の朝食はぬかすの？」

「いえ、何にも文句ありません。」

こうして朝食は始まったのであった。

それからすべての料理を食べ終えることなど不可能であり、開始三十分後僕は早速苦しんでいた。

「もう無理。食えない。」

「……そうね、さすがに作りすぎたかしら。」

そして今日の朝食はすべて剣治の分となったのである。それから僕は洗物をしている涼に話し掛けて先程話し合った事を告げた。始めはきょとんとしていたがだんだん笑顔になってきた。

「ありがと、そういうことなら準備してくるね。」

少々きつめの目をしているが笑った時の顔はたとえるなら……そうだあ、般若がにやりとしたような……ではなく子犬が笑うような笑みという事にしておこう。そんなことを考えていると涼がこっちに戻って来た。

「剣治さんも行くの？」

なぜか涼は剣治をさん付けで呼んでいるのだが、僕を呼ぶ時は呼び捨てである。

「うーん、剣治は寝ているからそのままにしておいたほうがいいと

思うよ。」

「じゃあ、二人で行くの？」

まあ、結果的にいうならそうなるだろう。

僕がうなずくと涼はまた部屋に入った。扉越しに声が聞こえてくる。

「覗かないでね。」

……どこに覗くほど価値のありそうな御方がいられるのか僕は聞いてみたいと思ったが聞かないでおくことにした。そんなことをいうと竹刀が僕に牙をむきそうな雰囲気があったからである。

そして部屋から涼が出てきたので早速外に出ることにした。だが、僕はまだこの土地になれたわけではないので詳しくわからない。結局、涼に道案内をしてもらうことになった。

そして気がついたことが一つある。町ゆく男達はみんなして涼をまじまじと眺めて溜息をついているのだ。

中には、

「……美しい。」

なんて恥ずかしいことを平然と言っている人もいる。

・・・僕にはどこがどう綺麗なのかさっぱりわからない。そして中には涼に声をかけてくる人もいた。

「どお、その可愛い女の子これからお茶しない？」

いつの時代の口説き方であろうか？今度誰かに聞いてみたいと思う。

「ごめんなさいね、今の私には無理です。」

性格をころつと変えてそんなことを平然と言っている。やれやれ、本性知ったら結構いなくなるんじゃないかなあ。

「今、私には彼氏がいますから私が今度一人の時に声をかけてください。」

へえー彼氏ねえ。そんなのどこにいるんだろうか？

涼は僕の手を引き寄せ僕の腕に抱きつく。

「ラブラブなんですよ。」

・・・すごく退散していく気の毒な男性の方。僕は涼に手をとられたままその背中を眺めていたのであった。

「どお、彼女のいない時雨にささやかなプレゼント。」

「・・・そりゃどうも。」

そんなことでついたのはデパート。

「何買ってくれるの？」

「……安眠枕。」

途端不思議そうな顔をして僕の真正面に立つ。

「安眠枕？」

その目はなぜそうなのか不思議そうであった。

「いや、ほら涼はもつとぐつすり眠れるだろう！だから安眠枕を涼に上げるんだ。」

「ふーん、まあぐつすり眠れるならいいけどね。」

「……僕もこれでぐつすり眠れるから大助かりだよ。」

「……なんか言っただ？」

「い、いや何も。」

この後なぜか涼は顔を赤くしながら僕を案内してくれたのであった。なせかはわかるはずもないので放っておくことにしよう。

安眠枕は色々種類があったので本人に選んでもらうことにした。

「それじゃあ、これがいいや。」

そう言って選んだのは抱き枕並みの大きさの安眠枕である。ちょっと値段がきつかったがどうせ剣治とのわりかんというやつである。その後二人でいろいろなところを回ってみたりもした。そんな中

本屋にこの前あった気がする人物が僕に手招きしていたのである。

僕の目が正常であるならばその人物はこの前の眼帯貴族さんであることは間違いないだろう。僕は涼に少々トイレに行つて来るといつて本屋に入つて行つた。

「いやあ、また出番が来るなんて思わなかったけど登場できて嬉しいよ。さてそんなことより意外と楽しそうだったよ。」

「はあ、それは別にいいんですが・・・」

彼が手に持っている本はそのあれである。まあ、年頃の男子生徒がもしかしたら隠し持っている類の本である。

「しかし何で僕に手招きしたんですか？」

にやりと笑うその顔は持っている本の影響力もありなんとなくあくどい感じのする笑みであった。

「いやあ、涼は僕を見かけると襲ってくる可能性が非常に高いからね。」

かわいそうだと同情している自分であった。眼帯貴族さんはしみじみしながらも思い出したように僕に一つの手紙を渡した。

「家族からの手紙だといってこれを渡しておいて欲しい。」

「はあ、わかりました。」

彼はそういつて本を片手にカウンターに消えていった。

僕は早速その手紙を私にいったのだが、涼はトラブルに巻き込まれたみたいであつた。

「そのカワイコちゃん、僕と付き合つてよ。」

「いやだ、放せばか。」

途端顔が真つ赤になり起こつた顔になるナンパ男。

「んだろこらあ。」

……急いで止めに入らなければあの男の命はないかもしれない。今更気がつくのも相当鈍感だと思つたがあんな数の竹刀を投げれる人間はこの世にいるはずがない。つまるところ彼女は人間ではないこととなる。

僕は急いでナンパ男に後ろから掴みかかり説得することにした。なぜなら目の前の涼の背中には黒いもやもや、つまるところ悪魔の羽が出現しているからなのである。

「落ち着いてください。」

「何だてめえは！」

じたばたしている男を押さえながらも涼を見てみるといつのまにか竹刀を持っていた。そして竹刀を蒼い光が包み込む。

「すみません、悪いんですがあなたには気絶してもらいます。」

ドコオ。

倒れた男から手を離し涼を抱えその場から撤退する。当然のようにこのデパートにも警備員という方々は存在するわけだからいざこざなどでお客様を護ったりするもんである。そして今回の悪者になる確率が高いのは僕である可能性が高いような気がしたからその場から逃げたのである。

そのまま家にかえる為に涼を担いだまま町の中を駆け抜ける。さいわいまちで人を見かけることはあまりなかったから女の子をさらっているようには誤解されなかったようである。家に帰り着いて涼を下ろす。その顔はなんとなく恥ずかしそうであつたがなぜだかは僕にわからない。彼女は短く、

「ありがとう。」

とだけ告げて部屋（僕の部屋である。）に入って鍵までかけてしまった。

「……お帰り時雨君。」

剣治が顔を出しこつちにやってきた。顔色はすこぶる良いみたいなのでほっとした。

「今日はぐっすり眠れたから良かったよ。彼女達が僕を看病してくれていたからかな？」

「……それはよかったね。」

そして、今度は僕がその場に倒れる番であつた。当然の事だともって欲しい。今日は歩き回った上に最後には走って帰ってきたのだから体がぼろぼろなのである。おまけに寝不足も手伝っているの

だ。

僕はそれから晩御飯時に目を覚ました。僕の部屋のベットに眠っていたことに気がついて体を起こそうとすると扉が開いて誰かが入ってきた。

「やれやれ、やっぱり君も寝不足で倒れたのか。」

ピンクのエプロンをつけている剣治はお玉を片手に持っている。

「早く起きてきなよ、それから君にお手紙が届いているよ。」

渡された手紙の差出人は不明であるが内容は僕も忘れていたことであつた。

『兄様、お誕生日おめでとう。』

……今日は僕の誕生日でもあつたのである。剣治は更に僕にいろいろなものを渡してきた。

まず、箒。そして次に黄金に輝く林檎・の置物。

送ってきてくれた人達がありありとわかるのであえて名前は伏せておくことにしよう。

だが、僕の誕生日プレゼントはこれだけでは終わらなかった。最後に剣治が渡してくれた手紙には墨で、

「りべんじ」

とかかれていた手紙であつたのである。

だが、今日見る気にはならなかったのでそれは机の上において僕は立ち上がりお腹を満たすために部屋を出て行ったのである。

その後、寝る準備をしてから床にいつもしているようにこたつ布団を引いて準備をする。涼が布団を使っているために僕の分の布団はもうないので仕方ないことである。だが、今日はいつもと違って布団で寝ることが出来た。なぜなら・

「せっかく大きな枕買ってくれたんだから一緒に寝よう?」

と涼が言ってくれたからである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・少々ショックを受けましたが今回の話はむかつくぐらいの話だね。」

「・・・そうですね、今度時雨様にあつたらおしおきとやらが必要のようですね。」

「・・・まあ、不本意ですが今回はここで終わりたいと思います」

「うわぁ、無理やり元気出してますねえ。」

「・・・絶対に今度出てやるから皆様それまで首を長くして待っていてくださいね。」

「・・・まあ、せいぜい頑張ってくださいね。」

そのじゅう はぴばあすでい（後書き）

今回、更新遅かったの申し訳ないです。次回は出来るだけ頑張つて早く出したいと思います。

そのじゅうち　せーとかいちょう

涼と僕の誕生日の次の日のことである。その日は朝早くから起きて朝食を作っていた。

まあ、先程まで隣にいた涼の幸せそうな顔を眺めていても悪くないと思っていたがそれは考えないでおきたいと思う。安眠枕が聞いたのかいびきは書かなくなった。だが隣に女の子がいたのでなかなか眠ることは出来なかった。

僕はあくびをしながらフライパンの中で転がるウインナを眺めながらそんなことを考えていたのであった。出来た目玉焼きとウインナーを皿に盛り付け、ご飯をついた所で扉が開く。

まず剣治が先に起きてきてあいさつをして、自分の席につく。

そして次に涼がすっきりした顔で僕にあいさつをした後、意味ありげにこんなことを聞いてくる。

「時雨、昨日はよく眠れたかなあ？」

その目は何か期待しているようだが僕は正直に答えるしかなかった。

「うーん、ちょっとベッドが狭かったから辛かったかな。」

そう言うってから自分の席（剣治の前）に座りお茶を口に含む。剣治は既に朝食を半分ほど食べ終えていた。

「そういうことじゃなくてさ、もしかしたら私の体に何かした？」

口に含んでいたお茶を盛大に剣治に吹きかける。案の定剣治は顔

からしずくをばたばたらしながら僕をにらんでいる。

「……………時雨君、朝からなに吹き出してんだい。僕が殺菌作用のあるお茶まみれになってしまったじゃないか。これがばいきん なんだたら小さくなっていたところだよ。」

「う、ごめん。」

「今更動揺することじゃないだろ。」

そんなこんなで謝りながら登校の準備をする。

涼はまだ中学三年なので学校自体が違うので途中まで送っていくことにした。そして今日は珍しく満さんがやってこないのだった。平和な朝の登校時間をすごせると思ったが……………。どうやら僕の考えが間違っていたようである。涼とわかれて剣治と学校に向かうとする後ろから落ち武者のような声が聞こえてきた。

「……………時雨君、いつの間にあんな竹刀娘と仲良くなったのかなあ……………」

ぞくりとしながらも後ろを振り返ってみると満さんがにらんでいるのが確認できた。

「あ、あの子はその……………」

僕はしどろもどろになりながら答えようとしたのだが、朝のこともあり変に涼を意識してしまいなかなか答えることが出来なかった。剣治に助けを求めるとにやりと笑いながらこっちを見ている。

「……………時雨君、僕は今日学校をきれいにするために早く学校に

行くことにしたよ。僕の体は殺菌作用のあるバリアが護ってくれているからね。」

そんなことをいって走り去ってしまった。その後僕が何とか事実を踏まえながらも嘘みたいな話をして何とか満さんをなだめて成仏（正常）に戻すことが出来た。しかし成仏させる時間はかなりかかり、気がつくとう昼食の時間になっていたので剣治と共に弁当を食べることにした。そして突然校内放送が鳴り響く。

『えー、皆様、生徒会長様が長い修行の末にお戻りになりました。これから生徒会長様のありがたいお言葉を皆で泣きながら聞きましょう。』

・・・・なんじゃそりや。

そしてスピーカーから流れてくる声にはどこか聞き覚えのあるような声だったがまず間違えることのない真実がある。

『こほん、皆のもの久しぶりだな。私ことベリル・リナはこのたびようやくこの学校に戻ってくることが出来た。』

廊下では『ベリるさまバンザイ』と叫んでいる生徒がかなり多い。しかしこの声はどう考えたって女の子の声である。ここはまだ男子校なのではなかったのだろうか？

『・・・しかしいつもより帰ってくるのが遅くなってしまったようだ。口調が変わっているので話しぶらいのでここからは普段どうりに振舞わせてもらおう。』

うーん、そういえばどこかで聞いたことのある名前である。だがこんな古臭いしゃべり方をする知り合いをもっていただろうか？思

い出せないのは単に僕の脳がボケてしまったからだろう。

『……おーほっほ。みななもの、喜ばない。私が来たからにはこの学校を共学になんかせないわ。なぜなら私は今まで一度しか負けてないからね。』

「……付き合いきれないね。時雨君、満さん、今から急いで放送室に行こう。」

僕は微妙に行きたくないような感じがするので嫌だったが二人に手を取られ引きずられるような感じで校舎を走っていったのである。途中廊下に立っている生徒は僕を見ても逃げずに何か言っているようだ。

「お前もそろそろ年貢の納め時だな。」

そんなことを言っているのが過労時で聞こえたぐらいなので後の発言も変わらないことだろう。そんなこんなで放送室の前に立ったのはいいが今日はどうやら厄日のようなのである。不適に笑う二人に囲まれて腕をつかまれ思いつきり放送室に放り込まれた。

「「あさのうらみじゃー。」」

後ろで閉まる扉からそんな言葉が聞こえてくる。そして僕はマイクに向かって話している人物の足元に転がっているようである。見上げるとそこにはやはりどこかで見たことのあるような顔が今度は僕を見下ろしている。

「おーほっほ。ようやくあえたわね、天道時 時雨。今度は負けないわよ。」

はて、やはり記憶が不鮮明であるから思い出すことが出来ない。こういう場合は本人に確認を取るのが一番である。しかし、失礼があつてはならないので、僕がもてるだけの知恵を使い目の前の人物に話し掛ける。

「すみません、あなたは誰ですか？」

いやあ、まいったね。部屋の空気が一瞬のうちに凍ったのを肌で感じるの生まれ初めてだ。

「・・・・・・・・私を忘れたとその口は言いましたか？」

や、やばい。このままでは僕の命にかかわることになるかもしれない。こうなつたらやけだ、感を頼りにしていくことに越したことはない。しかしそんなことをしている余裕はないようだ。

「・・・・・・・・私は綺麗かしら？」

あ、思い出した。この人あのと時の神様だ。

「まあ、確かに綺麗ですね。」

ベリルさんからは強烈な光が放たれており、神々しいのは嫌でもわかるというものである。

「ふふふ、今度はこの前みたいに無様に負ける気がしないわ。」

やれやれ、僕には人を傷つけて快感を覚えるような変な性格ではない。今回も悪いがさつさと気絶してもらつことにした。

『我は、紅き悲しみと蒼き哀しみを背負いし天界と魔界を統べるもの。』

世界が紅と蒼に包まれる。久しぶりに使ったのでなんとなく家に帰ってきたような感覚に襲われる。

「……………今回も悪いですが気絶してもらいます。」

「やってみなさいよ。」

黄色い光と紅と蒼が混じった光（簡単に言うなら紫。）が激突。今までたっていたベリルさんはドサリと床に倒れ伏す。どうやら今回も勝つことが出来たようなのでほっとする。

「……………悪いけど今日は悪戯させてもらいますよ。」

近くに転がっていたサインペンを片手に僕は気絶しているベリルさんの顔に芸術的？な落書きをほどこしてこれまた都合よく転がっていたポラロイドカメラで写真を撮った。

一応言っておくがそれ以上の事は何もやってないといっておこう。ちゃんと写真をとった後は顔のマジックは消しておいた。また何かいちゃもんをつけられたら僕は困ると思うから念の為である。

既に二人は教室に帰っておりようやく到着した僕を冷え冷えする目で眺めた後話し掛けてきた。

「やれやれ、負けてあげればよかったのに。」

「そつだよ時雨君、たまには負けてあげなよ。」

その後、家に帰り着くまでその口撃は続いたことを記しておく。さて、その頃ようやくめを覚ました生徒会長さんは夕焼けに染まる空を見上げて悲しそうな溜息をついているのであった。

「ああもあつさり負けてしまうとは全く想像もつかなかった。」

そしてもう一度溜息を出す。が今度の溜息は悲しそうな感じはしなかった。

「……私の体に傷をつけずに気絶だけさせるなんて優しい奴のままですわね。それに私が気絶している間何もなかったなんてなかなか見所のある奴ですわ。」

まあ、時雨の要領のよさがなんとなく滲み出ているような気がしないでもないが今回の生徒会長撃破のうわさは瞬く間に広がり各地（教室）から白旗をあげる者達が多く出ていた。つまり、このことにより徐々に共学の動きは激しい勢いを増していくのである。

そのじゅういち　せーとかいちょう（後書き）

なんかやるきないみたいな題名になったのでお詫びしておきますね。さて、出てきたけどあっさり負けてしまった生徒会長。満を帰しての登場でしたがあまり活躍できてなかった気がしますね。というところで出来たら今度はせいとかいちょうをもう一度登場させて何とかしてやりたいと思います。まあ、そろそろ終わりに近づいているような雰囲気がありますが最後は久々の時雨のどじが発揮されておしまいにしたいと思います。

そのじゅうに 終わりにから始まるかもしれない物語（前書き）

とうとう最後になってしまいました。あっさりしすぎていると思いますが今まで有り難うございました。

そのじゅうに 終わりから始まるかもしれない物語

お風呂に入った後、この前もらった果たし状らしきものを開けてみた。それにはこの近くの神社までの地図がかかれていて、日付けは明日の夜、PM9時である。

「うらやましいね、君はもてもてじゃないか。」

そう言っ て近づいてくる彼の手の中には新たな手紙が収まっており、その手紙を差し出すということは間違いなく僕宛の手紙であることは間違えることのない真実のようだ。

差出人は生徒会長。用件は共学の事を話し合う会議を開くことになったようである。

「この前君が生徒会長を倒してしまったから渋々ながらも共学について話し合ってくれるみたいだね。」

「・・・しかしまあ、明日の朝からなんてベリルさんは気が早いな。」

どうやら明日もまた少々大変な日々を送らないといけないようなので今日はいつもより早い寝ることにしよう。そしていつものようにこたつ布団を引いているとお風呂から上がったきた涼が不思議そうな顔をして僕を見ている。

「何やってんの?」

「ん、寝る準備だよ。」

まだこたつを出すには早い季節だと思つので寝る以外にはこの布団の活用性はないと思う。さつさと布団を強いて床に転がっている安眠枕を買つ前に涼が使つていた枕を頭の下に持つていく。

「そ、そこで寝なくてもベットがあるじゃん。そつちで寝なよ。」

そう言ってくれるのは嬉しいがそうも言つてられない事情がある。さすがに二人で寝るのはきついし、ほとんど密着状態になった挙句に目の前には涼の寝顔があるのだ。いびきはかなくなったが、これでは再び寝不足状態に陥つてしまうのは必死である。

「狭いから無理だよ。それじゃあオヤスミ。」

さつさと眠ろうとしたが寝ることは出来なかった。剣治が扉を開けて大きな布団を持ってきたからである。

「さ、時雨君、これで狭くないだろう。」

全くもって都合のよろしい少年である。その顔にはあのときの顔（お茶をかけてしまったときの事である。）が浮かんでいたのである。

「さあ、これで何も文句はないだろうに。それじゃあ僕はこれで失礼するよ。」

あつという間に僕をどかして布団を敷いて部屋を立ち去ってしまった。後に残ったのはぽかんと口を開けている僕と少し顔の赤い涼だけだ。

「……こ、これなら大きいから心配ないよね。じゃあ寝ようよ。」

」

「・・・・・・・・・・。」

さつさと布団にもぐりこんだ涼の後を溜息交じりに追って僕も布団の端つこのほうに入る。まあ、当然の行為だ、年頃の女の子と同じ布団に寝るなんていけないことであろう。

そんなことを考えながら目をつぶると何かの気配がする。僕の隣からであり、離れていたはずの涼が僕の隣にくっついていているのだ。

「・・・・・・・・もつとくっついていい？」

そんなことまで言ってくる。

「だ・・・・・・・・わかったよ。今日だけは涼の人形になってあげるよ。」

駄目といおうとして涼の顔を見るとそれは不安な顔をしていたのでついつい承諾してしまった。僕は甘い人間なのは間違いないことだろなあ。多分、チョコレートケーキ並に甘いんだろうな。

・・・・・・・・それより気になることがある。だが今日はまだいいだろう。

「共学になったらこの学校からいなくなるの？」

いやあ、まさかばれるなんて知らなかったな。

「うん、家族がいる所に帰るんだよ。」

「・・・・・・・・そう。」

そのまま涼は静かに眠ってしまった。僕もそのまま睡魔に襲われてあえなくダウン。しかしこの頃から異変は始まっていたのだろう。そんな事に僕は気がつかずにのほほんと生活を送っていたこととなる。覚えている人がいるかどうかはわからないが僕は僕が天使になった理由を完璧に忘れていたのである。

そして朝、いつもより早く起きた僕は朝食を食べに行こうとして体を起こそうとしたが涼がいまだにプロレス技をかけるようにしてしがみついているのを見てあっさりまた横になったのである。そう、この生活は長くは続かないものであり、何かの偶然である。

それから涼が起きるまで僕は涼の顔を眺めていたのであった。

・・・・その為、学校にいくのがかなり遅くなって遅刻してしまったことをかいておこう。

「では、これより共学についての会議を始めます。」

そして、今会議を始めたのはいいのだが会議室にいるのは三人だけである。僕とベリルさん、剣治だけである。

「始めに多数決を取りたいと思います。共学に賛成する人は手を上げてください。」

なぜかけんじが仕切っているが気にしないでおこう。結果は満場一致で可決。

「・・・さて、これで理事長の言うことは解決したも同然だ。だがまさかこんなに早く解決するなんて思わなかったな。」

独り言なのかわからないがそんなことを剣治が言っている。その顔には苦虫を噛み潰しているようである。

「やはり何かおかしい。時雨君、今からちよつと行きたいところがあるからついてきてくれたまえ。」

僕の手を掴み剣治は会議室を出て行ったのである。

それからあった事は様々な出来事であった。そして意味ありげに言わせてもらうと僕の不注意のせいでこの世はリセットボタンを押したゲームのようになってしまったことを簡潔に書いておきたい。

まず、天界の陰謀を知った僕とけんじはこの世のリセットボタンを奪い逃走。だが、転んだ拍子にあやまって押してしまったのである。

そりやもう、おすとプチプチなる箱などを買うとよく付いてくる衝撃を吸収すると思われるビニールのように……。

そして僕自身にもリセットが掛かってしまったようである。

まあ、皆さんあまりにもあつけないですがこれで一応終わりである。また何かの偶然で会えたら良いという事においてくださいな。そして僕の新しい生活はこのように始まるのであった……。

「今日には彼、天道時 時雨君は引越すそうです。」

完

そのじゅうに 終わりから始まるかもしれない物語（後書き）

さて、あっさりと完結的に終わってしまいましたね。じつにまあ、さっぱりしすぎてますがこれにて終わりですね。またどこかで時雨たちが活躍する日々がありましたら宜しく願いますね。そんな時は何がどうなって世界が消えてしまったかももう少し詳しく書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8547a/>

アンノウン・エンジェルズ

2010年10月10日01時35分発行